

---

# GS ~ ガンダムシステム

紅椿

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GS（ガンダムシステム

### 【Nコード】

N3435Y

### 【作者名】

紅椿

### 【あらすじ】

これはもし束さんが開発したのがISじゃなくてガンダムだったら…。というお話です。登場する機体はガンダムだけです。11/10ゼロさんのアイデアにより、訓練機はふつうのMSにします。後々登場させますので期待してください。

EPISODE 1「出会い」(前書き)

カオス物が好きな主が作った作品です。ゆる〜くりとどうぞ。

## EPISODE 1「出会い」

少年織斑一夏は困惑していた。その理由は…。

(覚悟していたがきついな…。俺以外みんなクラスメイトが女子なのは…。)

GS<sup>ジイエス</sup>。正式名称ガンダムシステムは本来女性のみ扱える兵器だった。しか

し、彼は男性で唯一GSを起動させたため、国立GS学園に強制入学させられた。

そう。彼が今いる場所こそが国立GS学園だ。今教卓の前で副担任の山田先生があれこれ説明をしている。他の生徒はそんなの構いなし、とばかりに俺に視線を注いでいる。

ふと視線を左にやるとそこには幼なじみの篠ノ之箒がいた。俺の視線に気づくとふいっとそらされてしまった。

(箒…助けてくれよ…。)

そんな事を考えていると教室の扉が開いて一人の女性が入ってきた。ん？この威圧感、つり上がった目、もしかして…。

「関羽!?!」

べしっ!!

「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者。」

おもいつきり出席簿で叩かれた。ちきしょう、痛てえ…。こんな力、まるで千冬姉…、

あれ？千冬姉の声にどことなく…。

「織斑先生、会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてしまってますまないなごほん!! 諸君! 私が担任の織斑千冬だ! 諸君らを一年で使い物にするのが私の役目だ。教師の言ったことは覚えろ!! 覚えられなく

ても覚える!!」

絵に描いたような鬼軍曹。これが俺の姉の織斑千冬だ。第1回G  
Sモンド・クロッソ大会で無傷での優勝を成し遂げた最強の称号「  
ブリュンヒルデ」を持つ姉。弟としては微妙な立場だ。

自己紹介も無事終わり、(頭部負傷者一名)二時間目までの休憩  
時間となった。

「ちよつといいか?」

その声の方を向くと…、

「箒…。」

幼なじみが立っていた。

ここはGS学園屋上。他の女子生徒を振り切って俺と箒は屋上に  
たどり着いた。

「久しぶり。六年ぶりだな。」

「ああ…。」

六年ぶりに再会した箒は以前よりも鋭さが増している。でも結構可  
愛くなつたかも…。

「そついえばさ。」

「?」

「剣道全国大会優勝おめでとう。」

「な、何故お前が知っている!？」

箒は相変わらずの口調でそう言った。昔からこいつは男勝りな口  
調だったな。まあ、そ

れはそれで人の個性だけだな。

「何故つて、実際に会場で観戦したからだよ。」

「なら一言くらい声をかけてくれれば良かったのだが…。」

箒は残念そうな口調でそう言った。



EPISODE 1「出会い」(後書き)

どうでしたか？戦闘はもう少し先です。

**DATE FILE (前書き)**

この作品に関するの設定です。知りたい事がありましたら気軽に質問してください。



## DATE FILE

DATE データファイル  
FILE

### 1・GS ジーエス

正式名称ガンダムシステム。操縦者に合わせてサイズは変化する。装着時はMS少女の様な感じ。篠ノ之束博士が開発した。女性のみ扱える設計となっている。

### 2・登場人物

#### 織斑一夏 おりむら いちか

世界で唯一GSを動かせる男性。試験会場にあった訓練GS「RX-78-1」を起動させてしまい、国立GS学園に入学することになる。自覚無しに女性をときめかせている。極度の唐変木だが徐々に…。GSの操縦になれるにつれてとある力が…。専用GSは「エクシア」。

#### 篠ノ之箒 しののへ ほう

一夏のファースト幼なじみ。小学校の頃、自宅の剣道場に通っていた一夏と稽古を共にしていた。心底一夏に惚れている。姉がGSを開発したため、小学4年の時に一夏と別れる。

専用GSは無し。

#### 織斑千冬 おりむら ちふゆ

一夏の姉にして担任の教師。第01回世界GSモンド・クロッソ大会を無傷で優勝した

過去を持つ。冷たい態度を一夏にとっているが心の底では一夏を気にかけている。

現役時代のGSは「オー」から「ガンダム」。

セシリア・オルコット

イギリス代表候補生。学園入試を主席で通過。社交辞令をマスターしており、礼儀正しい。

専用GS「ケルディム」。

ファンリンイン  
鳳鈴音

中国代表候補生。一夏のセカンド幼なじみ。冪と同じく一夏に惚れている。

専用GS「アルトロン」。

シャルル・デュノア

フランス代表候補生。第二の男性GS装着者としてGS学園に転入してきた。そんな彼には秘密が…？

専用GS「ヘビースームズ改」。

しじいだ かずま  
白枝一馬

本作オリジナルキャラ。日本代表候補生。第三のGS装着者としてGS学園に転入。彼がGSを扱えるようになったのにはある人物よってらしい…。

専用GS「ユニコーン」。

たけし かんぞう  
更識簪

一馬と同じ日本代表候補生。あまり目立ってはいなかったが一馬によつて…。

専用GS「ストライク」。

ほうじょうあすか  
鳳城飛鳥

本作オリジナルキャラ。親の都合で韓国に住んでいた時期に代表候補生になる。観光代表候補生。一馬の幼なじみであり、彼に想いを寄せている。韓国に住んでいたのに関西弁が抜けていない。専用GS「フリーダム」。

**DATE FILE (後書き)**

新キャラが登場したら随時ここに簡単な紹介文を載せていきます。

## EPISODE 2「英国貴女登場」(前書き)

EPISODE 3です。この話の中にでてくる表現はrihitoさん作「IS「インフィニット・ストラトス」 WHITE B L A D E & L I O N S O U L .」に登場するキャラ「リオン・マードック」から許可をもらって引用させていただきました。rihitoさんありがとうございます。ではお楽しみください。11/13一夏を怒らせすぎとの指摘がありましたので感情をかなり抑えました。

## EPISODE 2 「英国貴女登場」

(何なんだよ…、このPSフェイスソフト装甲とかGNジーエヌドライブとか…。)

一夏は困惑していた。教科書に載っている用語が理解できていなかった。

「あの、織斑君？」

「はいっ!!!」

一夏は思わず大きな声を出してしまった。

「あの…、もしかして、怒ってます？」

怒ってるなんて滅相もない。

「いえ、ちよつと驚いただけです。すいません。」

「そうですか、良かったです。何か解らないところはありますか？あれば言ってくださいね。私は先生ですから！」

この際言ってしまうおう。

「先生！」

「はい、織斑君!!!」

「全部解りません!!!」

ズガシャアアアア!!!

何人かの女子がずっこけた。え？俺何か変な事言ったかな？

「織斑。入学前に事前学習書を読んだか？必読だぞ。」

事前学習書？もしかして…。

「古い電話帳と間違えて捨ててしまいました…。」

バシッ!!

千冬お得意の出席簿アタックが一夏の頭を狂い無く襲った。

「後で再発行してやる。一週間で覚える。いいな。」

「はい…。」

千冬姉に睨まれたらどんなに気の強い奴でもたじろぐな…。

そんな一夏の考えが読まれていたのか、再び出席簿が一夏の頭を襲った。

二時間目が終わり、休憩時間に入った。

「ちよつとよろしくて？」

その声をかけてきたのは外国人だった。若干薄い金髪は腰のあたりまで伸びている。制服はいかにもお嬢様らしいカスタムだった。ちなみにGS学園は制服カスタム自由。

「ん？」

「まあっ！！私が話しかけているというのにそのようなお返事！！誰だっけ。俺この子知らない。ともかく伝えよう。言葉だ。」

「悪いな、俺は君のこと知らないんだ。」

そう言ったらその女子はさらに驚いた。

「まあ、この私を知らない！？セシリア・オルコット、イギリス代表候補生のこの私を！」

俺はセシリアが言った言葉の中に引つかかる節があった。

「一つ聞いて良いか？」

「いいですわよ。下々の声に答えるのも貴族の役目。」

何かいかにも上から目線。あんま好きじゃないんだよね……。

「……………代表候補生って……………何だ……………？」

ドンガラガツシャーン！！！！！！

クラス中の女子がずっこけた。……………俺何か変な事でも言ったか？

「まあ！！日本の方はここまで常識に疎いのでしょうか！」

こら待て。常識も何も俺はGSの事はここに来るまで何も知らなかったんだぞ。

「常識ですわよ、常識！！！」

聞くだけ聞いてみるか。

「その代表候補生って？」

セシリアは腕を組んで説明を始めた。

「国家や企業の代表、その候補生、つまりエリート的事ですわ。単語から想像できるでしょう？」

なるほど。そう言うことか。

「そう、エリートなのですわ！私というエリートとクラスを同じにするだけでも奇跡！！幸運なのよ！！」

何か彼女の背景がバラになった気がしたが気のせいだろう。

「その事をもう少し自覚してくださいさる？」

「そうか。そりゃラッキーだな。」

あれ？セシリアが不機嫌そうな表情になった。

「馬鹿していますの…？」

「いや。」

「男性で唯一GSを起動させたと聞いて少しは期待していたのですが…、これでは…。」

俺に何かを期待されても困るんだがな…。

「まあ、どうしてもGSの事が知りたいなら、泣いて頼めば教えてあげない事無いですよ。下々の声に答えるのも貴族の勤め。それにエリートなのですから。唯一入試で教官を倒したエリート中のエリートですから。」

「入試って、GSを動かすのだよな？」

セシリアは「それ以外に何かあるのですか？」と答えてきた。

「俺も倒したぞ、教官。」

まあ、向こうが突っ込んできて回避したら壁に激突してそのまま気絶しちゃったんだけどな。

「倒したのは…私だけと聞きましたが…。」

震える声でそう言ってきた。

「女子だけってオチじゃないのか？」

「あ、あ、あ、貴方も教官を倒したっていうの…！！！！！！」

何か落ち着きが無い。とりあえず落ち着かせよう。うん、話はそれからだ。

「落ち着けよ、な？」

「こ、これが落ち着いて…。」



3時間目の始まりを告げるチャイムが鳴った。

「この続きはまた後で！逃げるんじゃないやありませんよ！」

誰が逃げるか。

「ではこれより、再来週行われるクラス代表対抗戦に出場するクラス代表を決める。ここで決定した者は今後生徒会会議への出席…、まあクラス長と考えた方がわかりやすい。自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

こういうお堅い役目は他の人に任せればいいな。さっきのセシリアって子に任せればいいのかもな。こういうの引き受けてくれそうだしな。

「はい、織斑君を推薦します。」

なるほど、俺か。……。

「つて俺ええ！？」

「私も！！」

「私は…篠ノ之さんかな？」

俺の名前に混じって篝の名前が挙がった。

「え？何でなの？」

「知らないの？篠ノ之。ほら自ずと出てくるでしょ、天才のあの人が。」

その女子はなるほど！と手で相づちを打つ。あの人とは篠ノ之束篝の姉さんにして、GSを開発した天才だ。そういえば今はどうしているんだろう。

「他にはおらんか？いないならこの二人で来週の実習時間に決定戦を…。」お待ちください！」「」

千冬がそう問いかける。そこへ割り込んだ一声。その声の主は。

「納得がいきませんわ！こういう役目は私こそ適任ですのに！！」

セシリアだった。エリートである自分が推薦されなかった事に腹を立てている。

「第一、こんな文化が後進的な島国に来てるだけでも耐え難いのにこの様な屈辱を一年間も味わえと!!」

「島国つて、イギリスも同じだろ。」

「日本と同じにして貰いたくありませんわ!」

「たく、頭が固い奴だ。もう少し柔軟な思考を持とうぜ。」

「こつちも言わせて貰うけどよ、イギリスだって大したお国自慢無いだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ...。」

「何ですって!!イギリスにだって美味しい料理はありますわよ!」

「まずい、怒らせた。ここは引き下がって事を片付けよう。」

「ごめん、こつちが悪かった。クラス代表は譲るよ!」

それを聞いて少し落ち着きを取り戻したセシリア。

「まあ、たとえ勝負をしても私の勝ちは見えていますわ。唯一男性でGSを起動させた織斑さんならまだしも」

「所詮姉の七光りで入学した篠ノ之さんに私が負けるはず...。」

「おい、それは言い過ぎじゃないのか。」

「はい?」

「まあ、確かに箒の姉さんは東さんだ。だけど、七光りだからと一概には出来ないだろ」

「セシリア・オルコット、お前を来週の決定戦で倒して反省させてやる。」

「何を急に...!先程譲るとおっしゃったのは貴方で...!」

「そこまでにしろ。オルコット、お前の先程の発言は良くない。織斑の方が正しい。この決着は来週のGS実習の決定戦で行って貰う。では山田先生、授業を。」

箒は一人考えていた。

(一夏が...。)

EPISODE 2 「英国貴女登場」 (後書き)

どうでしたか？ 戦闘は話の進行具合からしたら「一話くらい先です。」

ΕΡΗΣΟΔΕΡΚΗ

ΕΡΗΣΟΔΕΡΚΗ «100» (100%)

EPISODE 3「GN・001」

ようやく一日目が終わり、俺は帰ろうとした。

『生徒の呼び出しをする。一年生織斑。大至急学生寮事務室まで来るように。』

千冬姉に呼ばれた。学生寮事務室？何故だろう。俺は学生寮に向かった。

「織斑先生、お話って…？」

「お前の生活のことだ。事情があつてな、今日から寮で生活することになった。」

「え？俺って自宅通学だったんじゃない？」

「モルモットになりたいのか？」

「いいえ…。」

その一言で俺は沈黙した。まあ、妥当な理由だけど…。

「もう部屋は決まっている。1034号室だ。間違えるなよ。」

「はい。」

1034号室前に着いた。ここが俺の部屋か…。

一夏は扉を開いた。まず目に飛び込んできたのはベッドだ。見ただけでもフカフカ感が伝わってくる。そこのホテルよりよっぽど質が良い。流石国立。

「すげえ…。」

「誰かいるのか？」

「!!!!!!」

女子の声。それはシャワールームから聞こえてきた。慌てる一夏。

「ああ、同室になった者か。これから一年間よろしく頼む。」

声が徐々に聞こえやすくなってくる。近づいている証拠だ。

「こんな格好ですまない。シャワーを使っていた。」

（やばい…、あれ？でもこの声どこかで…。）

「私は篠ノ之箒」



「そうか…。」

「でも、俺は箒と同じ部屋になれて嬉しいぜ。」

その言葉を聞いた箒は表情が明るくなった。

「そうか、それは何よりだ！ではこれから一年間よろしく頼む！」

「おう！」

俺と箒は握手を交わした。

翌日、朝のSHRにて…。

「織斑、GSの事だが…、訓練機が用意できない。学園の方で専用機を用意することになった。」

その言葉にクラス中がざわついた。

「この時期に専用機…？」

「それって政府からの支援が出るって事よね…？」

「いいなあ、私も専用機欲しいなあ…。」

専用機ってそんなに凄いのか…。

「届き次第受け渡し及び適<sup>フットイング</sup>合化を行う。忘れるなよ。」

そして受渡日…。まさか決定戦当日とは…。

「織斑。これが、お前の専用機GN-001、エクシアだ。」

目の前には待機展開された専用機、「エクシア」が時を待っていた。この時を。

「背中を預けるように、そうだ。」

一夏の体にエクシアの装甲が装着されていく。一夏からしたらその感覚は一体化、と言える。

「よし、発進時間だ。準備は良いな。」

「はい。」

千冬の言葉に一夏はきちんと返事をする。

「一夏。」

箒が声をかけてきた。

「勝てよ、必ず、信じている。」

その言葉に勇気づけられた俺は指で「ありがとう」のサインを送る。

「発進タイミングを織斑君に譲渡します。」

山田先生がそう言ってきた。

「織斑一夏、エクシア発進します!!」

カタパルトから発進したエクシア。その背中からは設置されているGNドライブで発生

したGN粒子が美しくに尾を引いていた。

アリーナバトルフィールドにはすでにセシリアが専用機「ケルデイム」を装着して待機していた。

「逃げなかつたのですわね。」

「そつちこそ。」

「先日は申し訳ありませんでした…。素直に失言を認めますわ。」

その言葉は一夏にとつて意外だった。まさか謝ってくるなんて。

「解つてくれればいいさ。でも。」

「それと勝負は別ですわ!」

ケルデイムの主力武器「GNスナイパーライフルIE」がエクシアの胸部を直撃した。

「ぐあぁっ!」

それを受けて吹っ飛ぶが体勢を立て直し、右腕のGNソードのライフルモードでケルデイムを撃つ。しかし、簡単に避けられる。

「さあ、ワルツの始まりですわ!!」

ケルデイムの背部から何かが射出された。それはそれぞれ自動で動き、エクシアに向かつてビームを発射する。

「これがこのケルデイム最大の特徴、GNシールドビットによる全<sup>オ</sup>方向攻撃ですわ!」

くそっ!厄介だ、こいつは格闘型!接近できなければ意味が無い!ん?何故だ。あいつ、ライフルを発射してこない。もしかして…。試してみるか。

「はっ!」



エクシアは下半身背部に取り付けられたGNダガーを抜き取り、それをビットに投げつけた。それは見事に命中し、爆発した。

「何ですって！？当てた…。」

「ようやく解ったぜ。ビットは自己行動ではなく、お前が指示を出している。そして俺の反応が一番遅い角度から攻撃してくる。俺はさつき意識して反応の遅い角度を作った。そこへ攻撃をすれば破壊できる。」

セシリアにとって凶星だった。まさか読まれてるなんて。

あっけなく射出されたビットは破壊された。しかし…。

「ビットは11機ありましてよ！」

そう、搭載されているビットは11機。射出していたのは9機。

一夏は不意を突かれ、ビームを受けてしまった。

「一夏！！！」

煙が発生し、安全が確認できない。司令室で千冬が呟く。

「機体の能力に救われたな、馬鹿者。」

煙が晴れたそこには赤く輝くエクシアがいた。

#### トランザムシステム発動

そうエクシアのモニターに表示された。トランザムシステム。一部のGNドライブだけに搭載されているシステム。高濃度圧縮GN粒子を全面開放し、機体のスペックを3倍相当まで上昇することが可能。以上教科書から引用。

「はあっ！！！」

残りのビットを破壊し、GNビームサーベルを抜き、一気にケルディムに接近する。

「くっ……………！！！」

ビームの刃がケルディムを斬りつける直前、ビームの刃が展開を停止した。

機体の赤い輝きも沈黙し、動きが止まった。

『勝者、セシリア・オルコット。』

「……………」

負けた。俺は。

「全く、よくここまで持ち上げてくれたな馬鹿者。」

全く嬉しくない褒め言葉を千冬姉がくれた。

「にしても、何で負けたんだ？」

「トランザムシステムは、高濃度圧縮GN粒子と並行してシールドエネルギーも消費する。それでシールドエネルギーが空になった。」  
「なるほど……………」

「まあ、今回は自動発動だったが訓練すれば自在に発動できるようになる。お前ならな。」

「お前なら？なぜそう言い切れるんだ？」

千冬はフツ、と微笑み口を開いた。

「私の弟だからな。」

その言葉は下校している今も耳に残った。

「一夏、惜しかったな。」

「ああ、すまないな、お前に特訓してもらったのに……………」

「いや、相手は代表候補生、あそこまで戦えただけ良い方だ。」

「箒！」

「な、何だ？」

箒は突然大きめの声で名前を呼ばれて少し驚いた。

「これからの特訓に付き合ってくれ。」

「そうか、そうか。仕方ないな、よし、これからは共に特訓をしよう！——」

「ありがたい！」

シャアアアアアアアア……。

シャワールームにはシャワーが流れる音が響く。そこには先程一夏と戦ったセシリア・オルコットが立っていた。

無駄の無く引き締まった体型。胸はそこまで大きくないが（日本人と比べたら大きい）その大きさが体の見た目のバランスを整えているので本人としては複雑な心境だ。

（織斑……一夏……。）

（あの瞳は……。）

彼女の母親は今の女尊男卑の社会になる前からいくつもの企業を経営する人だった。

母は自分に対して厳しかった。それでも母を尊敬し続けた。いつか自分もあのような女性になりたいと。

一方父親は名家に婿入りしたせい、いつもオドオドして母の機嫌を伺っていた。その時からセシリアは決めていた。将来あのようなひ弱な男とは結婚しないと。

GSが発表されてから父の態度はますますひどくなった。

そして、両親は事故死した。一説は謀殺説がささやかれたが、事故現場がそれを否定した。ホテルが崩れ、200人近い死者が出た。あの日、二人は何故一緒にいたのか。

それからオルコット家の莫大な遺産を狙う輩が現れ始めた。遺産を守るべく、必死で勉強した。

そしてGS適正が高い事が発覚。国からは遺産を守るための様々な好条件が出された。

そして、稼働データの為に日本のGS学園にやって来た。

そして出会ってしまった。自分の理想の瞳を持った男と。迷いもなく、曇りもない。実直な瞳を持った男と。

（織斑……一夏……）

その名前を浮かべるだけで胸が熱くなる。

「もっと知りたい、彼のことを。もっと近づきたい、彼に。」

その声はシャワーの音で消えていった。

EPISODE 3「GN・001」（後書き）

ガンダムの戦闘シーンって難しいですね。さて次回は中華少女が登場します。お楽しみに。今回からアニメっぽい次回予告を入れます。

【次回予告】

「ねえねえ誰あの子？」

「代表候補生にして織斑君の幼なじみ！？」

「彼を取り巻く女性って多いね…。」

「次回もお楽しみに！！！」

## EPISODE 4 「中華娘降臨」 (前書き)

EPISODE 4です。ついにあの子が登場します。主はファー  
ス党なのであつかいはあまり…。他の党の方すいません。一筋なの  
で。

## EPISODE 4 「中華娘降臨」

「ここがGS学園…。」

その少女は夕暮れの中、ツインテールをなびかせていた。

「それでは一組クラス代表は織斑一夏君に決定です。」

織斑一夏「つて奴がもう一人このクラスに在籍してるのか。うんうん…つて、そんな訳あるか!!!」

「あれ、でも俺負けたし…。」

「それは、私が辞退したからですわ。」

そう言いながらセシリアが立ち上がった。

「貴族といえど失言は御法度。責任は取りますわ。それで、今回は一夏さんに代表の座をお譲りして責任を取りましたの。エレガントでパーフェクトなこの私が指導すれば一夏さんの実力は…。」

「ちよつと待て。」

セシリアに割って入ったのは筈だった。

「一夏の特訓は私が見ることになっている。本人から直接頼まれたからな。」

「あら、GSランクがCの篠ノ之さん。貴方の実力では一夏さんの成長は…。」

「お前のような撃つてばかりのいやらしい戦い方こそ意味がない。」

一夏のエクシアは近接格闘型だぞ。」

二人が言い争っている。そこへ…。

「そこまでにしろ。貴様等のランクなど産まれたばかりのヒヨコも同然。織斑はもう教えて貰う相手が決まっている。割り込みはよせ。」

千冬がさらに割って入った。千冬姉の言った事つて妙に効果があるんだよな。セシリアも鎮火してるし。

一時間目が終わり、休憩時間になった。

「知ってる織斑君？二組のクラス代表が交代になったんだつて。」

「え？本当に？」

どうやら二組のクラス代表が交代したらしい。

「あれね、おりむく興味あるの？しのっち一筋なのに？」

そんなのんきな口調で話しかけてきたのはのほほんさんこと布のほとけ本音。だぼだ

ぼ系の服を着用している癒し系。

「な！何故そうなる！！」

「えくだつてさ、しのっちの為にあそこまで言うんだよ。そう考えちゃうよ。ふあく眠い…。ぐう…。」

寝ちやつてるよ。立ったまま。本音の発言に俺と箒は顔を赤らめる。ちなみにおりむくとは俺、しのっちとは箒の事だ。

「話を元に戻すけど、強いのかな？」

「専用機を持つてるのは一組と四組だけだから楽勝だよ！」

「その情報古いよ。」

教室に響く声。その声が聞こえた方向を向くとそこには一人の女子が立っていた。

「お前、…鈴か？」

「そうよ！中国代表候補生、ファンリンイン鳳鈴音！今日は宣戦布告に来たって訳！」

鳳鈴音と名乗った少女。小柄な体躯で茶髪をサイドアップテールで纏めている。

「あれが二組クラス代表…。」

「中国代表候補生…。」

（なんなのだ…。一夏と親しそうに…。）

箒は一人そう考えていた。手に握ったシャーペンはいつの間にか粉々に砕け散っていた。

「鈴！何格好つけてんだ？全然似合わないぞ！」

その言葉に鈴の顔が赤くなる。



「な、何て事いうのよあんたはあ!!」

お、俺の知ってる喋り方に戻った。それでこそ鈴だ。

「どけ。邪魔だ。」

「だ、誰…。」

鈴の表情が凍り付いた。この反応って事は我らがクラス担任の千冬姉が降臨なされた。

「ち、千冬さん…。」

「学校では織斑先生だ。代表候補生になって礼儀を忘れたか。さつさとクラスに戻れ。」

「はい…。」

鈴はとぼとぼ歩いて教室を出ていった。

放課後、俺と篤は第一アリーナに向かった。

「つたく、一夏、遅いわよ。女の子を待たせるのが男にとってどれだけ重たい罪か…。」

鈴が立っていた。やばい、鈴が怒りの兆しを見せている。穩便に事を…。

「おいおい、待てよ。待っててくれって俺か鈴が言ったんならまだしも…。」

「ま、いいけど。」

ホッ、助かった。何だろう、後ろから毘沙門天の気配を感じる。

え?何で毘沙門天か解るかって?そりゃ、振り向いたらそこには竹刀を構えて怒りが露わになった篤さんが立っておられるからじゃないですか。

「一夏…私がいるというのに他の女と約束か…。楽しそうだな…。」

覚悟おおおお!!」

この際毘沙門天とか関係ない!!逃げろおおおおつつつつつ!!

「自業自得ね…。馬鹿…。」

鈴は呆れていた。何か面倒くさくなったからアリーナ、出ていこ…。

その後一夏はアリーナを百周して篤の竹刀の餌食になった。



鈴が何か呟き始めた。お？お腹すいたのか？それともお腹痛いのか？うーむ…。

「幼なじみなら良いのねっ！！」

## EPISODE 4 「中華娘降臨」 (後書き)

疲れました。連日投稿はきついです。励ましの言葉が何よりの栄養剤です

### 【次回予告】

「部屋変わって…。」

「行動力あるよね…。」

「次回では織斑君の過去が…!」

「え?もしかして織斑君の知られざる秘密が明らかになるとか!??」

「次回もお楽しみに!」

EPISODE5」過去の傷（前書き）

EPISODE5が本当のEPISODE5です。すみませんでした。

## EPISODE 5 「過去の傷」

「お願い、部屋変わって」

「馬鹿な事を言うな!!!」

鈴が部屋にやって来た。その理由は部屋を変われ、だ。いきなりすぎる。

「いやぁー篠ノ之さんも男と一緒にじゃ気まずいでしょ。あたしが変わってあげる。」

「別に私は気まずくなど…（あつてると言えばあつてるんだが…）」  
箒は俺に抗議の眼差しを送ってきた。俺に振るなよ…。

「さ、一夏。手続きに行くわよ。」

「あ、おい!!」

鈴が俺の手を引っ張り、寮の事務室へ向かおうとした。

「こらぁ!!!」

「馬鹿!!! 箒!!」

箒は置いてあつた竹刀を鈴に振り下ろそうとした。しかし…。

「!!!」

「部分…展開…。」

鈴は中国代表候補生。つまり専用機持ち。部分展開はお手の物だ。

「今の、生身の人間なら本気であぶないわよ!」

「あ…。」

箒は持っていた竹刀を落とした。床に当たる音が響く。

「まったく…!」

鈴は部分展開した右腕を動かした。

ザシュッ!!

「一夏…?」

動かしたGSの装甲が一夏の腕を切っていた。一夏の腕からは大量とまでは行かないがそれなり

の量が出血していた。

「あ……………血……………」

「うわああああああ!!!!」

一夏が血を見て叫び始めた。

「とりあえず先生に事情を説明してくるわ。」

二人で一夏の応急処置をした後に鈴はそう言い残して部屋を後にした。

しばらくして千冬が部屋にやって来て一夏は寮の医務室へ運ばれた。箒は千冬から部屋で聞いた。一夏が何故あそこまで血に怯えたのかを…。

四年前、箒が転校してから三ヶ月が経過した頃。一夏は鈴といつも通り下校していた。

「ふーん、一夏って剣道やってたんだ。いままで知らなかったわ。」

「ああ、千冬姉がやってみろっていわれてさ。それからなんだ。」  
そんな何気ない会話が続けていた。

ドンッ!

「痛たっ!」

鈴が誰かとぶつかってしまった。普通の人にぶつかったなら話をしてあやまれば済んだ。しかし…。

「おい痛いなあ。骨が折れてしまったぜ。治療費、払って貰おうか。」

「いるいるこういう奴。ほんといつの世の中にも最低な奴はいるんだな。」

「払える訳ないでしょう馬鹿!!」

鈴は気が強く、こんな感じの相手にも反論する性格だった。

「払えないなら、体で払って貰おうかあ!!」

ぶつかった男は鈴の頬を平手打ちにした。それで気絶する鈴。

「鈴!!」

一夏は無我夢中で男に立ち向かった。男はポケットに入れていた

ナイフを振った。

ザシュツッ!!

ナイフは一夏の腕を切った。傷口からは大量の血が溢れ出た。

「うぐっ!! うわあああああああ!!」

痛みで思い切り叫ぶ一夏。その声を聞いて近くの交番の警察官が駆けつけた。

「君!! 大丈夫か? 名前は?」

「お……織斑、一夏……。連絡先は…バッグの中の手帳に……。」

一夏は気絶した。駆けつけた警官は一夏と鈴を交番まで運んだ。

それから一時間後、一夏は目を覚ました。病院のベッドに一夏は寝ていた。

「気がついたか。」

横には千冬姉が座っていた。

「千冬姉…、鈴は?」

「鈴音は無事だ。怪我もなく今は自宅だ。」

「よかった……。」

一夏は安心したのか、再び眠り始めた。

「すみません、織斑一夏君の、保護者の方ですか?」

後ろから一夏の治療を行った医師がやって来た。

「はい、姉です。」

「なら都合がいい。実は……。」

「本当ですか!??」

「はい。一夏君は恐らく今は多量の血を見るとひどく怯えてしまい、精神不安定になってしまいます。恐らく切られた時の血を見て……。」

「そうでしたか……。」

千冬は決めた。今後一夏には血を一切見せない。

「……という訳だ。その時鈴音は気絶していたから何も知らない。そこは理解してくれ。」

千冬の話聞いた篤は驚きを隠せなかった。まさか自分が転校し



た後にそんな事があつたなんて。

「篠ノ之。あいつを頼む。私以外であいつを一番理解しているのはお前だけだ。」

「わかりました。任せてください。」

千冬は安心した。一夏を理解してくれる人がいてくれて。

部屋で箒は緑茶を一人飲んでいた。

「ただいま箒。」

一夏が帰って来た。腕には包帯を巻いている。

「怪我の方は大丈夫か？」

「ああ、細胞再生活性化治療、とかいうやつを受けたから安心だ。

対抗戦には差し支えない。」

それを聞いて箒は安心した。

「その、千冬さんから聞いた。お前は昔……。」

「聞いたのか……。くっ……!」

一夏が少し怯えた。思い出したのか、体が若干震えている。

「一夏……。」

「箒／＼／!？」

箒は一夏をそつと抱き寄せた。いくら唐変木の一夏と言えど女子に抱き寄せられたら赤くなる。

「お前は、もう怖がらなくてもいい。怖ければ私が側にいてやる。だから安心しろ。」

「箒………。うっ……。」

一夏の目が光った。

「泣いているのか……?」

「な訳ないだろ……。男が女の前で泣いてたまるかよ……。」

「泣いても良いぞ。」

「へ?」

その時の箒の表情はとても慈悲に溢れていた。

「男でも、泣いてしまうことはある。今回はたまたまそれが私の前だった。それだけではないか。」

「あ…、俺…。」

「私の元で良ければ、泣いても良いぞ。」

一夏は箒の優しさを体中で感じ、自分の我慢していた事を全て吐き出す様に泣き出した。

## EPISODE 5 「過去の傷」(後書き)

一夏が怯える表現は沙月さん作 I S i f ) 鈴 i n )  
より許可を頂いて拝借いたしました。沙月さん、ありがとうございます。

### 【次回予告】

「鳳さんの専用機、格好いい〜!!」

「織斑君勝てるかな…?」

「大丈夫!!きつと勝てるよ!!」

「けどその勝負に乱入する輩が!!」

「次回もお楽しみに!!」

EPISODE 6 「黒い不死鳥」 (前書き)

対抗戦始まります。

## EPISODE 6 「黒い不死鳥」

GS学園第一アリーナ。ここで本日、一年生によるクラス代表対抗戦が行われる。

「一夏さん、私が教えた無反動回転アブソリュートターン、活用してくださいね。格闘戦仕様とはいえ、射撃武器もあるのですし…。」

そう言ったのはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生。  
「私の教えた剣での立ち回りも忘れるなよ」

そう言ったのは篠ノ之箒。俺の小学校時代の幼なじみ。こいつに對して最近何か言い表せない何かが…。

「織斑君、発信準備、良いですか？」

「あ、はい。いつでも良いですよ」

そう言ったのは山田真耶。俺の副担任の先生。ちなみに担任は…。  
「織斑、お前に発進タイミングを譲渡する。いつでも良いぞ」

千冬姉こと織斑千冬。絵に描いたような…ここまでにしておこう。  
「織斑一夏、エクシア、発進する!!」

カタパルトからエクシアはGN粒子を靡かせながら発進していった。

観客席から発進する一人の少年。見た目は日系であり、恐らく日本人だろう。

「あいつが一人目の男性装着者、織斑一夏…」

その少年の左腕には白い時計が付けられていた。

「逃げなかったのね」

そう言ったのは鳳鈴音。中国代表候補生にして一夏の主に中学校時代の幼なじみ。

「あたりまえだ」

「あのさ、こないだのあれ、ごめんね。昔の嫌な記憶、思い出させちゃって…」

こないだのあれとは、寮での出来事。あれはきつかったが…事が  
いてくれたから落ち着けた。無論、鈴も先生に報告してくれたから  
あいつにもその点は感謝。

「いいぜ、別に気にしてないし」

「うん、本当にごめんね。でも…」

「それと勝負は別よ！」

試合開始のアラームと共に鈴は専用機である「アルトロン」のツ  
インビームトライデントを用いてこちらへ攻撃を仕掛けてきた。そ  
れを一夏はGNソードで受け止める。

「くっ…押されてる…!!」

「まだまだあ！」

ズドン!!

格闘武器同士でのつばりあいなのに脇腹に何かが直撃、エクシア  
は吹き飛ばされて地上へと落下した。

「くそ…、まさかフレキシブルビームキャノンがあるなんて…やら  
れた…」

「初見にしてはやるじゃない」

一夏は痛む体を必死に起こした。

(こつなつたら…TRANS-AMで終わらせる!!)

「TRANS-AM！」

エクシアの全身が紅く輝きだした。TRANS-AM SYSTEM  
EMが発動したからだ。猛スピードで鈴へ迫るエクシア。

「!?嘘…速い!!」

GNソードがアルトロンを一太刀にしようとしたその時  
。 。  
シユンッ!!

目の前をビームが通過した。ビームが飛来した方向を見ると

「何よあれ…」

一機のGSがいた。

「まずいわ、乱入者よ！」  
「先生！！」

「山田先生、アリーナ全体にLv4警報を！！」  
「了解しました！」

『Lv4警報発令！Lv4警報発令！生徒は教員の指示に従って速やかに避難せよ！繰り返し…』

「織斑先生、乱入GSのデータです！」

千冬はモニターのデータを見つめる。

「製造元不明、無人GS……」

「ハルファス……」

アリーナではエクシアとアルトロンが協力してハルファスを迎撃していた。

「畜生、こいつ、強い！！」

フェザーファンネルが二人を苦しめていた。

「ああもう、鬱陶しいったらありやしないわ！！」

代表候補生でも手こずるハルファス。黒い不死鳥の姿を持つGS。

「俺のエクシアのシールドエネルギーも残りがわずかだ……」

「弱気になるんじゃないわよ！！何か、解決方法があるはずよ！！」

「いや、代表候補生であるお前だからこそ、打つ手がないことが解ってるんじゃないのか？」

鈴は考えを読まれて面食らっていた。　　そうよ、確かに一夏の言う通りじゃない。でも……。

「篠ノ之さん？どこへ行ったのでしょうか……？」

セシリアは先ほどまで側にいた幕を探していた。彼女の脳裏に何が浮かんできた。

(篠ノ之さん、まさか……!!!!)

その場への待機命令を千冬から言い渡されたセシリアはただ無事を祈るほかなかった。

「一夏あ……!!!!」

アリーナにその声は轟いた。箒が拡声器を最大出力にして叫んでいた。

「箒!?!」

「男なら、男なら、そのくらいの敵など倒してみせる……!!」

その声を聞いてハルファスはフェザーファンネルを箒を攻撃するように指示を出した。ビームが箒に迫る。

「まずい、箒、逃げろ……!!」

「っ……!!!!!!!!」

間に合わない……!!くそっ、エクシア、少しだけで良い……!!TRANS-AMを起動させてれ……!!!!!!!!

その願いが通じたのか、エクシアは再度TRANS-AMを起動させた。

「はああっ……!!」

GNダガー、GNライフルでフェザーファンネルを全て撃ち落とし、箒の安全を確保した。

「貴様、箒を……」

「箒を攻撃したなあああ……!!!!」

その時、一夏の瞳が変わった。怒りに満ちた、そして進化した瞳。箒を攻撃した罪は……罪は重いぞおお……!!」

GNビームサーベルでハルファスの両腕を切り落とした。TRANS-AMはGNドライブによって性質が違う。少なくとも言えることはエクシアのTRANS-AMは……。

絶対防衛、それら全てを通過して本体に直接ダメージを与える。



それにより、ハルファスの両腕は切り落とされた。

「うおおおおおおお！！」

GNソードでハルファスを真つ二つに切り落とし、戦いは終了した。

「はあ…疲れた…」

そう呟きながら一夏は寮の自室の扉を開けた。

「ん…？何か、良いにおいがする…おおっ！！」

「遅いぞ一夏。その…すまなかつたな…。アリーナでは…」

良いにおいの正体、それは箒が作った焼魚だった。ちなみに焼いた魚は秋刀魚<sup>さつまい</sup>。旬ではないが美味しそうな仕上がりがだ。

「アリーナの事は別に良いよ。これ、俺の為に作ってくれたのか？」

「ああ、その、なんだ、たまにはこういう食事を二人で摂りたくてな…」

そういえば俺のとは別にもう一人前同じ物が用意されている。なるほど。

「それじゃ、いただきます」

一夏は早速秋刀魚に手を付けた。

「おおっ、美味い！！この味付け俺の好みなんだよなあ！」

「む、昔私の家で母さんが作った物をよく食べていただろ。その味を再現してみた。き、気に入ってくれたなら嬉しい」

久々に見たな、箒の笑顔。

その語も俺達は食事は昔の話しをネタにして楽しい食事となった。

翌日。教室が騒がしい。何故？そりゃ…。

「今日は、転入生を紹介します。まずはフランスからやってきたシヤルル・デュノア君です」

新しい嵐は目前に迫っていた。

場所は変わって一年四組。こちらでも同じような事態が…。

「えー、転入生の白枝一馬君<sup>しろえだかずま</sup>だ。彼は日本代表候補生、教わること

も多いだろっ」

「白枝一馬です。これからよろしくお願いします」

このクラスは一組の様な拍手喝采は起こらなかった。その中で一馬を見つめる少女がいた。

(……………)

その少女の名前は更識簪<sup>なほししかんし</sup>。一馬と同じ日本代表候補生。

GS学園にやって来た二人の男子。それは何を意味するのか。

## EPISODE 6 「黒い不死鳥」 (後書き)

オリキャラ「白枝一馬」を登場させました。専用機は…名前からして、解りますよね…？

### 【次回予告】

「男の装着者が二人も!？」

「何か凄い事が起こりそうだね…」

「今回はGSから離れてちょっとした日常!」

「次回もお楽しみに!」

## EPISODE7「日常」(前書き)

今回は日常を描きます。内容は短いです。シャルの日常はまた別の機会に描きます。

## EPISODE 7 「日常」

【一夏・箒】

「ん…もう…朝か…でも…日曜だし、もう五分…」

一夏はベッドで寝ていた。朝によくある「あともう五分…」の状態で。

ふにゆ。

(何だ…？柔らかくて気持ちいい…何かは…まあいいや…)

ふにゆふにゆ。

体で受け止める感触はとても心地良い。

「ん……」

ちよつと待て。ものすごい近くから俺の物ではない声が聞こえたぞ。

恐る恐る箒のベッドの方を振り向く一夏。目に入った光景は一夏の眠気を一気に吹き飛ばした。

ベッドはもぬけのから。つまり…。

「うわあっ！！！！」

ベッドの中の心地よい物の正体は箒だった。

(ね、寝顔が、超可愛い…／＼／＼)

普段の箒からは見ることに出来ない可愛さだった。

「う、五月蠅いぞ……………」

や・ば・い。

一夏は全力で部屋から脱出しようとしたが…。

朝の食堂にて片足を引きずる一夏が目撃されたらしい。

【一馬・簪】

~~~~~

先日転入してきた日本代表候補生の白枝一馬。彼は寮の廊下を歩  
きながら鼻歌を歌っていた。

「ん？聞き覚えのある声が…」

一馬はその声が聞こえる方へ歩いた。

「おーやっぱり！」

寮のTVにて放送していたアニメの声だった。タイトルはちなみに……。

「トラベル・ユニバース……」

「トラベル・ユニバース」。それは近未来に主人公の少年が太陽系からさらに遠い銀河系を巡るSFアニメだ。それを見ていた少女がいた。

「……貴方は……」

更識簪だった。一馬と同じ一年四組に在籍している同じ日本代表候補生だ。

「えっと……更識……さんだっけ？」

「うん……」

簪はゆっくりとうなずいた。

「更識さんってこのアニメ、好きなの？」

「ええ……だって……面白い……もしかして……変？」

簪は若干困った顔で質問してきた。

「いや、別に。女の子でも好きになるだろ、アニメ。馬鹿にはしないよ」

「……ありがと……/」

簪の表情は少し熱ぽかった。

「一緒に、見ようぜ！」

「……うん……」

【セシリア・鈴】

「………足りませんわね……」

そう言っつてセシリアはとある物を大量に鍋へ入れた。彼女が作っているのはカレーライスらしい。

（この料理で、一夏さんのハートをゲットですわ！ですけど……一馬さんの方が気になるのは何故ですか……？）

「セシリアー、何作ってるの？」

「一夏さんに差し上げるカレーを作っていますの」

「ちよっと味見させてー」

「いいですわよ」

パクツ。……………ドサツ。

「ちよ、ちよっと、鈴さん！？どうしたのかしら……」

セシリアがカレーを食べた。

パクツ。……………ドサツ。

キッチンに置かれていたとある物。その名前は……。

「汚れはこれで十分！！汚れキラー！！」

本日の犠牲者

凰鈴音    セシリア・オルコット

両者ともに食あたり……。

EPISODE 7 「日常」(後書き)

どうでしたか？面白かったのであれば幸いです。

【次回予告】

「白枝君のGSがっこいいね〜」

「デュノア君のGSもかっこいい〜」

「そこへやってくる新たな転校生!!」

「白枝君とデュノア君の秘密談義!？」

「次回もお楽しみに!!」



EPISODE 8 「可能性の獣」 (前書き)

シャルと一馬が戦います。そしてまた転校生！？一人じゃなかつたりして…。は次回のお楽しみ。

## EPISODE 8 「可能性の獣」

場所はGS学園第2アリーナ。ここは主に実習授業や自己訓練で使われる。現在アリーナにはシャルルと一馬がいた。

「それじゃ、始めるぜ」

「うん、負けないよ！」

両者ともにGSを展開していた。

一馬専用GS「ユニコーン」。世界各国の代表候補生のGSを製造している大手GS企業「アナハイム・エレクトロニクス」社製。一発で通常のビームライフルの数倍の威力を持つビームマグナムが特徴だ。

シャルル専用GS「ヘビーアームズ改」。デュノア社製第二世代GS「ヘビーアームズ」の改修機。第二世代が主流の時期は高性能のGSだったが第三世代の開発が重要となってきた今日、<sup>こんにち</sup>ヘビーアームズ改までが限界のデュノア社は株価が下落しているとか。火力は第三世代にも負けない。

「はあっ！」

ユニコーンの右手に握られたビームマグナムからビームが発射された。一般的なビームライフルと比べて太さは変わりないが威力が高い。ビームライフルの着弾にも耐える超耐久合金製の壁をへこますほどだ。

「凄い威力だね！でも…当たらなければどうと言うことはないよ！」

シャルルはヘビーアームズ改の左腕部に装備されている大型ガトリングガンを発射した。とてつもない量の弾丸が一馬を。

「いやーシャルル強かったぜ。負けたよ」

「僕の方こそ、ビームマグナム、だっけ？あれの威力には驚いたよ。命中したらひとたまりもないね」

一馬には一つシャルルに対して疑問があった。

(こいつ、なんでいつも俺とか一夏とかとは着替えないんだ?)

そう、シャルルは一夏と一馬と一緒に着替えたことはない。

物難しそうにシャルルを見つめる一馬。

「ど、どうしたの?」

「いや、別に…」

「変な一馬…」

こんなシチュエーション、どこかで見たことがあるような無いよ  
うな…。更識さんに聞いてみるか。

「じゃあシャルル、俺は先に帰るよ」

「あ、うん。また部屋でね」

一馬はそう言っただけで走っていった。

一人となったシャルルは呟いた。

「良かった…まだ…」

学生寮1039号室。この部屋の主は…。

コンコン。

「誰…?」

そう言いながらドアを開けたのは簪だった。

「よっ。更識さん。入って、良い?」

「あ…駄目…ごめん…話なら…外で…」

のぞかれない物でもあるのだろうか。のぞきの趣味はないが  
ともかく俺と更識さんは部屋の外で話しを始めた。

「でさ、話つてのは」

話を終えて部屋へ戻る一馬。部屋のドアを開けたらシャワーの音  
が聞こえた。そう言えばボディースーツ切れてたっけ…。使ってる  
のはシャルルだろう。

「おーい、シャルル、ボディースーツ」

「へっ」

シャワールーム。そこから出てきたのはシャルルにうり二つの女子だった。

「まさか…本当に…！」

「かつ、か…一馬…」

慌てて一馬は退室していった。

(更識さんの言っていたことが当たってた…！)

しばらくして、部屋から「いいよ」と声が聞こえてきた。扉を開けて中に入る。シャルル・デュノアのベッドに先程の女子がいた。てゆうか、シャルル・デュノア本人だ。ヘビーアームズ改の待機形態であるペンダントを着けている。

「で、なんで男装してここに来たんだ？」

「うん、これは、父からの命令なんだ」

「父、てもしかして、デュノア社社長の？いくら何でも自分のむす…じゃなくて娘にそんなこと…」

シャルルの口からは一馬にはにわかには信じられない言葉が出てきた。

「僕はね、『愛人』の子供なんだ」

「…！」

一馬にもその言葉は理解できた。しかし、現実には、こんなに身近な奴がそんな境遇とは思いもしなかった。

「僕がデュノアの本家に引き取られたのは、ちょうど二年前くらい。その際に、会社のこととかを知ったんだ。父からは母はもう死んだって聞かされたんだ」

「……………」

シャルルの話を口を開かず聞く一馬。それに安心したのか、シャルルは話を続けた。

「父の本妻に会ったときは驚いたよ。「この泥棒猫の娘が！」ってひっぱたかれたんだ。事前に知っていれば、こんな事にはならな

「ただただね」

「なるほど、でもそれがどうやったら男装につながるんだ？」

「デユノア社の開発できるGSは最新でも一世代後ろのヘビーアームズ。僕は代表候補生ではあるけどこんな旧式の機体が専用機、つてくらい会社は追い込まれているんだ。そこへ、君たちのご登場」

君たちのご登場。一夏と一馬だ。

「幸いなのか、僕は顔立ちが中性的だから、男装してごまかせたんだ。僕の役目は、君たちのGSの戦闘データを盗むことと、広告塔の役目。そして、失敗したら証拠抹殺のため、死なされるかな」

「っ……!!」

一馬は腸が煮えくりかえる思いでいつぱいだった。

「エクシアとユニ、もういい」…へ？」

「いくら、いくら父親だからってあんまりだ！！確かに親がいなければ子供は生まれない！だからといって何をしても良いわけあるか！！」

シャルルは困惑しながらも一馬に話しかけた。

「怒ってるの…？僕のこと…」

「お前のことを怒る訳あるか！命を…大事にしないなんて…！くそお！！！！」

「あのさ、一馬。命は確かに…だけど、どうしてそこまで…？」

シャルルの言葉に冷静になった一馬。

「言おうか？俺の過去を…」

「うん…」

「俺の母さんは、俺が一歳の頃に病気で死んだ。それから、父さんが俺を育ててくれた。父さんは、アナハイム社のGS開発責任者だったんだ」

「へえ…」

「一夏の一見の少し後に、あつただろ。アナハイム社GS工場が何

者かに襲撃されたって」

「うん…」

アナハイム社襲撃事件。アナハイム社のGS開発施設が何者かによって襲撃され、30人近い死者を出した事件。

「そこで俺の父さんは」

「俺が殺した」

「…！」

「いや、殺してしまった、の方があってるな。でも、あれはほとんど…」

「続けて」

シャルルは真剣な眼差しで一馬を見つめた。

「ああ…。事件の日、俺は自分で作った昼食弁当を父さんに届けに行っただんだ」

【事件当日 アナハイム社日本支部GS開発工場】

「父さん、はいこれ弁当。しっかり食べて頑張ってよ」

「一馬、いつもすまん」

「いいつて。母さんなしで俺をここまで育ててくれたんだし」

一馬の父、白枝王喜しらいえだおうきはふとひらめいた。

「一馬、お前に一つ見せてやるさ」

「何を？」

「今我々が開発中のGSだ」

「え…でも俺が見ちゃ…」

王喜は「安心しろ。男にや動かせない」と言っで一馬を案内した。奥のコンテナにはそのGSはあった。

「アナハイム社製第三世代GS「ユニコーン」だ」

ユニコーンは純白のボディが綺麗だった。

「これは…『グーッ！グーッ！』…どうした…！」

「チーフ！謎の集団による襲撃です！」

「よし、ユニコーンを安全区画まで運べ！配備GSを出撃させる！」

王喜は的確な指示で混乱する工場をひとまとめにした。

「さあ一馬、お前も……」

「どがああああん……！」

「はっ……！」

一馬が避難しようとしたその時、爆発で瓦礫が王喜の体を直撃した。

「父さん！」

「一馬………けがは………ないか………？」

王喜の背中からは大量の血があふれ出ていた。

「父さん……！俺が、あのとき、断つていれば……！……！」

「気に……するな……。それよりも、ここから……！」

四方を瓦礫で囲まれ、脱出できない。

「無理だよ……！」

「ひとつだけ………方法がある………。ユニコーンを………使え……」

確かに、ユニコーンを使えば脱出できる。しかし、一馬は男。G

Sは女にしか反応しない。

「起動しないよ……！」

「焦るな……。あれはお前が使えるように、ひそかにプログラムしておいた。ユニコーンは、お前の言うことしか聞かない……」

一馬はその言葉を信じてユニコーンに手をかざした。すると、自動的に装甲が装着された。

「嘘だろ……！」

「ふ……上出来だ……」

「父さん、一緒に脱出しよう……！」

王喜は嬉しそうで残念そうな表情で一馬を見つめた。

「私は……もう手遅れだ。お前だけでも………」

「父さん!!!」

「いけ、一馬!!!」

その時、王喜の真上の天井がさらに崩れ、王喜の体をつぶした。

「と、父さああああああああああん!」

一馬は悲しみに暮れた。ずっと自分を大切に思い、優しくしてくれた父の死。それは15歳の身には重くのしかかった。

「く……!」

そこへ、襲撃者がGS反応を感知してやって来た。

「嘘でしょ、男よ。二人目よ」

「私たちの捕虜にする?」

襲撃者達はユニコーンごと一馬を拉致しようとしたが…。

「はあっ!!!」

一馬はユニコーンの主力武器「ビームマグナム」を襲撃者に向けて発射した。

「がっ!?!」

襲撃者のGS「GN-X」は第二世代の量産型。しかしユニコーンは第三世代。世代の差という物なのか。一撃で展開を解除させた。

「くそっ、やっておしまい!」

リーダー格の女が指示を出した。全GSが一斉に射撃を開始した。

「さあ、そのGSをよこさない!」

「ユニコーンは、父さんから託された形見。お前達なんか……」

「渡してたまるかあああああああ!!!」

その時、ユニコーンの装甲が割れて紅いフレームが露わになった。そこから一馬の意識は途絶え、病院で目が覚めるまで起きることはなかった。

「　　」というわけ。話、聞いてくれてありがとう」

「悲しい……過去だね。一馬はそれをこらえて僕のことをあそこま



で……」

シャルルはこう考えていた。

（一馬は、もう両親がいないんだ…僕は、酷くても父親がいるもんね…）

「一馬」

「シャ……!」

一馬は絶句した。シャルルに抱き寄せられているからだ。

「僕の話聞いてくれありがとう。でも一馬の方がつらい経験をしてたなんて……」

「あ……」

一馬の眼が光る。

「我慢、しなくて良いんだよ」

「う……うわあああああああああああああああつ……!」

一馬は押さえていた物全てを放出するかの如く泣き叫んだ。

**EPISODE 8 「可能性の獣」 (後書き)**

一馬とシャルルの過去話でした。

**【次回予告】**

「また二人も転校生!?!」

「この学校は転校生のバーゲンセールなのかねえ……」

「あのごついGSすげーよ!」

「その中で目覚める力とは!」

「次回もお楽しみに!」

EPISODE 9「NEW TYPE DEATH TORY」(前書き)

ユニコーンの秘密が明らかになります。

## EPISODE 9 「NEW TYPE DEATHORY」

「あ……朝か……」

一馬は朝日で目が覚めた。

「シャルル……」

ベッドの脇でシャルルはすやすや寝ていた。一馬が寝るまで付き添ってくれていたようだ。

「可愛いな……／＼／」

昨日の夜、シャルルが女の子ということを知った。男なら何もなく、女の子と分かると意識してしまう。

「一馬君、どうしたの？顔色、悪いよ……？」

教室で簪が心配したのか、声をかけてきた。

「大丈夫、心配しなくて良いから」

「そう……何かあったら言ってね……」

一方一組は。

「今日も……転校生を紹介します。一人目は、韓国代表候補生の鳳城飛鳥さんです」

「鳳城飛鳥です。これからよろしくおねがいします」

韓国代表候補生なのに日本語が達者だ。でも、なんかぎこちない。

「二人目は、ドイツ代表候補生のラウラ・ボーデウィツヒさんです」

小柄な体躯。銀色のストレートはどこか威圧感を覚える。眼帯でなおさら。

「あいさつをしろ、ラウラ」

「はい、教官」

教官？ということは……。

「ラウラ・ボーデウィツヒだ……！！！！！！」

その一言は何よりもはつきりと、冷徹だった。

「貴様が…」

ラウラはゆっくりと一夏に歩み寄り、その手が  
がしっ！！

一夏がひっぱたかれる前に飛鳥が腕をつかんでいた。

「あんた、何しようとしたん？いきなり彼の頬をたたこうとしたなんて、無粋すぎひん？」

「はなせ、貴様には関係ない」

捕まれているにもかかわらず、動揺を見せないラウラ。

「関係ないなんて今はどうでもいい！いきなりたたこうとすることにウチは疑問があるんや！」

「鳳城。そこまでにしろ。ラウラ、貴様もだ。席に着け、SHRを再会する！」

「ありがとう、さつきは」

「いやあ〜ウチは別に何もしてへんけど」

「俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「ウチは鳳城飛鳥。飛鳥でええで。一夏、後ろであんたの彼女さんがお怒りやけど…ええの？」

後ろを向くとむすつとした箒が立っていた。急いで箒の下へ駆け寄る一夏。

「ごめん箒」

「馬鹿者…だらしなさ過ぎるぞ」

「今日の昼、二人だけで食べないか？」

それを聞いた瞬間箒の目の色が変わった。

「な、何、本当か！！いいだろう、屋上で食べるとしよう！」

「OK！」

飛鳥はふと廊下に目をやった。

「あれって…」

飛鳥は廊下に出て歩く生徒の肩をたたいた。

「やつほ」

「飛鳥…」

たたいた相手は一馬だった。

「ウチも代表候補生やで。一馬と一緒にや」

「懐かしいな、大阪での毎日」

「せやな、あんた、関西弁ぬけてもってるし」

キーンコーンカーンコーン

「じゃ、また！」

一馬は4組の教室へ戻った。

「あら？」

「え？」

間抜けな声を上げたのはセシリアと簪だった。アリーナには二人だけだ。

「簪さん、こちらにはどのような？」

「機体の…武装試験。自分で組み上げた、武器の調整」

「私でよろしければ相手をして差し上げますわよ」

「うん…、よろしく…」

互いにGSを展開して構える。簪の専用機「ストライク」は高機動パッケージ「エールストライカー」を装着していた。

「では参り…」

その言葉は遮られた。モニターにこう表示されていたからだ。

GSの反応を背後に確認。ロックされています。

その通り後ろを向くセシリア。そこには一機のGS。装着者は。

「ラウラ・ボーデウィット…」

「ドイツ製GS『セラヴィー』…」

「ほう…：イギリスのケルデイルに日本のストライク。データで確認したときの方が強そうだったな」

その言葉は挑発なのだろうか。

「あら、出会っていきなり愚痴だなんて、同じ欧州連合として恥ず

かしいですわ。それとも、ドイツの方々はそのような言い方しかできないのですか？」

「戦ってみなくちゃ、解らないよ」

その言葉を聞いたラウラの口元に笑みが浮かぶ。

「では、試してみるか？」

「望むところ!!」「」

アリーナへ続く廊下。そこを一夏と一馬は歩いていった。

「午後の授業って…あ、4組のお前に聞いても意味無いか」

「ははっ、そうだな」

よくある学生の会話。

「ねえねえ、今アリーナで代表候補生同士が模擬戦やってるって!」

「へえ、おおかたセシリアとだれかかもな。言ってみようぜ」

二人はアリーナへ走っていった。

「嘘だろ…」

二人は目を疑った。セシリア、簪の二人が圧倒されていた。疑うようにしたのはこれではない。

「GSから、生命危機警報が出ている…」

そう解った瞬間、二人はGSを展開してアリーナの遮断シールドを突き破って戦場へ向かっていた。

「一夏、二人を頼む!」

「了解!」

一夏は負傷し、展開が解除された二人を抱え、観客席まで運んだ。

「織斑君…?」

「一夏さん、無様な姿を、お見せしました…」

「ゆっくり休んで…!!?」

一夏の言葉は遮られた。

「ぐあああああっ!!」

ユニコーンの様子がおかしい。純白の装甲の隙間から紅く輝くフレームが露わになっている。

「おい、あれってかなりやばいんじゃない？」

ユニコーンガンダムデストロイモード。装着者の感情が高ぶり、いわゆるキレた状態になると発動する。GSは絶大なパワーを得るが装着者の意識は発動システム「NT-D」に乗っ取られ、GSのシールドエネルギーが0になるか、装着者に呼びかけ、クールダウンさせるまで止まらない。乗っ取られることなく、制御できたときの様子は明らかではない。「止まれ、一馬！」

一夏は呼びかけるが届かない。

「こうなりゃ、直接ぶん殴って止めるしかない！」

GNソードを構え、ユニコーンへ斬りかかるエクシア。ユニコーンもビームサーベルを抜き、対抗した。

「目を覚ませ、一馬！」

「……………」

一馬から返事はない。徐々に押され始めたエクシア。

「ちきしょう、もう、どうなっても知らないぞ！TRANS-AMトランザム

！」

エクシアの機体が紅く輝き、ユニコーンの背後に回った。ビームサーベルを蹴りで落とし、GNビームダガーで機体を斬る。

「自分を…見失うなああああ！！！」

一夏の目が変わった。何かの輝きを持つ目に。進化した人類の様な目。

「はっ……！一夏……」

「一馬！？今すぐ展開を解除しろ！システムにまた乗っ取られるぞ

！」

「ああ……」

一馬はユニコーンの展開を解除した。



EPISODE 9 「NEW TYPE DEATHORY」 (後書き)

ユニコーンのNTIDはこんな感じですよ。

【次回予告】

「何か緊迫した様子だったね」

「ユニコーン、ちょっと怖かったね…」

「次回は一馬君の大阪時代が!？」

「次回もお楽しみに!!」

## EPISODE 10「それぞれの心意気」(前書き)

ハルファスガンダムに何故か愛着がわきます。SDじゃなくて他のガンダムのようなスタイルのイラストないでしょうか…。主は絵が描けても模写が関の山です。

長文失礼しました。ではどうぞ。

## EPISODE 10 「それぞれの心意気」

「はあ……はあ……はあ……俺、一体…？」

「一馬、お前はユニコーンのNT-Dに意識を乗っ取られていたんだ。一体何故…？」

まだ痛む体を半身ベッドから起こし、説明を始めた。

「あいつ、ラウラと戦っているときに行ったんだ。弱者の命は、どうでもいいと…。それから意識が…」

恐らくその時にNT-Dが発動したのだろう、と一夏は考えた。

「ま、とりあえずゆっくり休め。あいつの怪我は大したこと無いらしい」

「ありがとな、一夏」

一夏は医務室を後にした。

「遅いぞ一夏！」

箒が待っていた。

「ゴメンゴメン。それじゃ、帰ったら急いで食事に行こうぜ」

「そ、そうか。一夏は私と食べたいのだな！仕方ないな…一緒に食べよう」

箒の表情が明るくなった。

「手つなぐぞ」

「あ、おい、ちょ…！」

一夏に手を握られ、観られないように赤面する箒。

(一夏の奴、どうしたんだ？昔はこんな事無かったのに…／／／)

その日一馬は夢を見た。

「一馬、ウチ、引越すんや」

「飛鳥…？」

中学一年の秋。それは突然訪れた。飛鳥が韓国へ引越すと。親

戚が韓国人らしく、その人のサポートの為に家族揃って引越すらしい。

「ウチは泣かへん。一つだけ、約束してくれへんか？」

「ああ、何を？」

「また再会したらウチと」

ああ、これは飛鳥と別れる時か。懐かしいな。

三日後。

「え？ウチと組みたいの！？」

「ああ。駄目か？」

組みたいとは、今度行われる学年別トーナメントのペアのことだ。ちなみに一夏はそれを聞いた瞬間速攻で箒にペアの交渉をして速攻で決まったらしい。

「てつきりシャルルと組むと思つとつたんに…。あの子、女の子やし…」

飛鳥がシャルルを女だと知っている理由。それは、偶然だった。昨日のことだった。飛鳥は一馬を夕食に誘おうと部屋を訪れた。

「一馬ー？夕食食べにいこー。おるん？」

部屋のドアを開けた。するとそこには素っ裸のシャルルがいた。

「え…シャルルって、男やったよな…なんで…胸があるん？しかも、ウチより大きい…」

「今すぐ入って！説明するから！」

そう言われてウチは部屋に入って説明を受けた。親の命令で男装していたことも。広告塔として利用されていたことも。何なん！いくら親だからってそんな事して良いわけないやろ！

「ああ、あいつは頑張ってみるらしい。だから、組む相手がいなくなった。んでお前と組むことにした。それだけだ」

「はあ…そうなん…（全く意識されてへん…）」

「あ…駄目だった？」

「うっん、全然！喜んで組ませてもらっわ！」

ちなみにその会話に夢中になりすぎて始業のチャイムに気づかず

それぞれ先生の攻撃が命中したのだった…。（飛鳥は重傷）

「え！？私ですか？」

「はい。学年別トーナメントの選手の中で専用機を持っていない人に各学年一機ずつ特別機が貸し出されます。専用機を持っていない人の中で成績最優秀者が対象です。一年生では篠ノ之さんが選ばれました。これが貸し出される特別機、「Rアストレイ」です」

箒の手には真耶に手渡された待機形態の腕輪。学年別トーナメントでチームが敗退するまで専用機と同様の性質になる。それを装着する箒。

「ありがとうございます。頑張ります！」

「はい、頑張ってくださいね」

箒はアリーナで早速特訓を始めた。

（行くぞ、アストレイ！）

箒の体にRアストレイが展開した。シールド、ビームライフル、ビームサーベル。そして近接格闘戦様大型日本刀ガベラストレイト「東雲」だ。

「すごい、これはすごいぞ！」

帰寮門限ぎりぎりまで特訓をした箒だった。

「お疲れ箒」

「ありがとう。当日は優勝をねらうぞ！」

「おう！お互い頑張ろうぜ！」

互いに気合いを入れあつたのだった。

少女は部屋のベランダに立っていた。美しい銀色の髪を靡かせながら。

（あの人の強さが私のあこがれ、そして目指すことが生き甲斐…）  
その少女、ラウラ・ボーデウィツヒ。強さを求めるドイツ代表候

補生。

（その人い泥を塗る織斑一夏…）

ゆっくりと眼帯がはずれ、金色の瞳が露わになる。

（許さない！）

EPISODE 10 「それぞれの心意気」(後書き)

半分寝ている状態で書いたのでどこかおかしいかもしれませんが。

【次回予告】

「ついに始まった学年別トーナメント！」

「ついに飛鳥の専用機がベールを脱ぐ！」

「織斑君の戦いも見逃せない！」

「次回もお楽しみに！」

**EPISODE 11 「自由の翼」 (前書き)**

ついに始まる学年別トーナメント。飛鳥初戦闘です。



## EPISODE 11 「自由の翼」

GS学園第一アリーナ。ここでは今日、学年別トーナメントが開催される。代表候補生の実力を計るための各国迎賓、候補生の素質がある人物の為の調査員などが招かれている。

「にしても、凄い数だな…」

「ウチも驚いたわ。こんなぎょーさん人が来るなんてな」

飛鳥と一馬がそんな会話をしている間にトーナメント表が発表された。

「一馬、初戦やで！」

「え、マジ!? いったい派手に行こうぜ！」

「おう！」

一馬と飛鳥はハイタッチで気合いを入れた。一方…。

「一夏…」

「ああ、いきなりだな…」

一夏&箒ペアは初戦にラウラ&セシリアのペアになった。

アリーナの右舷カタパルトには飛鳥、一馬がGSを展開して待機していた。

「白枝君、鳳城さん、発進準備よろしいですか？」

「…いつでも！」

真耶のアナウンスを聞く二人。そして二人に発進タイミングが譲渡された。

「白枝一馬、ユニコーン行きます!!」

「鳳城飛鳥! フリーダム、行くで！」

カタパルトから二機のGSが発進した。

ユニコーン。一馬の専用機。純白のボディに恐ろしいシステムを搭載している。

フリーダム。飛鳥の専用機で尋常ではない程の稼働時間を誇る。

「なあ飛鳥、相手は誰だっけ？」

「アホ！ちゃんと見とき！シャルルと簪やで！」

その言葉通り、反対側からはエールストライクとヘビーアームズ改が発進していた。

「一馬、手加減はしないよ！」

「こっちこそ」

『3・2・1・試合、開始！！』

そのアナウンスと共にフリーダムは腰のビームサーベルを抜き取ってヘビーアームズ改に迫る。

「くっ…！！」

アーミーナイフを展開して、応戦する。しかし、出力が段違いだ。

「これが、ウチの韓国で開発された稼働ユニット、ニュートロンジャーマーキャンセラ N J C や！」

「N J C！？核エネルギーで動いてるんだ…」

N J C。GSのコアユニットには核エネルギーが使用不可能にするため、束自信による独自の核エネルギー抑制装置「N J」が搭載されていた。しかし、それを打ち消す装置が搭載されていると言っことは。

「フリーダム、篠ノ之博士が直接設計したんだね…」

「知らへんけどなっ…！」

ビームサーベルでアーミーナイフを破壊し、一気に懐へ迫る。しかし…。

「させないっ…！」

間一髪で簪が同じくビームサーベルで防いでいた。

「ありがとう簪…」

「うっん、デュノア君のは射撃戦向きの機体だから…、接近戦は無理があると思っつてね…」

ストライクにストライカーパック換装の指示を出した。エールス

トライカーが収納され、新しく水色のパックが装着された。

「頼むよ、ソードストライク！」

近接格闘戦仕様のソードストライク。大きなビームソードが特徴的だ。

「はあああああっ！」

簪は身の丈ほどあるつかという剣を振りかざす。しかし、回避運動によって避けられる。

「このフリーダム、格闘よりも…」

背部ウイングの影からビームの発射口、腰部のレールガン、右手のビームライフルがストライクを狙う。

「射撃が強いよ!!!」

一斉に全ての発射口からビームやら何やらがストライクに向けて発射された。

「嘘…!?!」

全て命中し、満タンから警報が鳴るまでシールドエネルギーを削られた。

「化け物みたいな火力…!」

「はあああああ…!」

ユニコーンのビームマグナムから高出力のビームがヘビーアームズ改に向けて発射される。

「くっ!」

それを避けるだけで精一杯のシャルル。

「前のお前はもつと強かったぞ！」

「言ってくれるね!!!」

ヘビーアームズ改の砲門が開く。

「避けられるかな!?!」

一斉にミサイルやガトリングガンが発射された。しかし、一馬は動揺していない。

「こんな事もあるつかと!」

ビームマグナムを収納してあらたにバズーカを展開した。

「はあっ！」

バズーカから発射された弾薬は途中で炸裂し、全てのミサイルを打ち落とした。ガトリングガンの弾はシールドで防ぐ。

「嘘!？」

動揺するシャルル。その隙を狙ってユニコーンはビームサーベルを抜き取り、ヘビーアームズ改を後ろから斬る。

「くっ…!!！」

シールドエネルギーが大幅に削られる。わずかに残ったが…。

「ゲームオーバーだぜ」

頭部バルカン砲でゼロにされ、展開は解除された。

「デユノア君…!!！」

「余所見は禁物やで!!！」

ビームサーベルですれ違いざまに斬られてエネルギーゼロになるストライク。

「ここまで、か…！」

「白枝一馬・鳳城飛鳥の勝利！」

第一回試合はこうして幕を閉じた。

そして第二回戦。一夏&箒ペアVSラウラ&セシリアのペアの戦いが始まるうとしていた。

「初戦から貴様と当たるとはな…待つ手間が省けたものだ」

「それは何より」

緊張した趣で武器を構える。

「箒、無理はするなよ。相手は二人とも代表候補生。強敵だ」

「分かっている。お前こそ、抜かるなよ」

「3・2・1 試合開始!!」  
激動の第二試合が始まった。

EPISODE 11 「自由の翼」 (後書き)

飛鳥のフリーダム表現は思っていたより作りやすかったです。

【次回予告】

「始まった織斑君の試合！」

「篠ノ之さん頑張ってるね！」

「ボーデウィツヒさんのGSに異変が!?!」

「次回もお楽しみに！」

EPISODE 12 「TRIAL LINK SYSTEM」 (前書き)

—夏VSラウラ!しかし、途中で異変が…?—

## EPISODE 12 「TRIAL LINK SYSTEM」

「はあああああ!!」

エクシアはGNビームサーベルを抜き取り、セラヴィーに迫る。

「はあっ!!」

しかし、GNフィールドを展開して防がれた。原作とは違い、GNフィールドの粒子量を集中させることで格闘武器も防ぐことが出来る。

「開幕直後の先制攻撃とはな。単純明快とはこの事だ」

「半分正解半分不正解。忘れたか?この試合は」

エクシアの背後からビームが向かってくる。

「タッグマッチなんだぜ!」

ビームはセラヴィーのGNキャノンを一門破壊した。発射したのは。

「私を忘れて貰っては困る」

Rアストレイを展開した箒だった。

「くっっ…!!」

セラヴィーの背後から無数のビームが迫ってきた。

「セシリア!」

ケルデイムのGNシールドビットから発射されたビームだった。

「私もいましてよ!!」

ケルデイムから次々とビームが放たれる。

「箒、散開だ!」

「了解した!」

それぞれ散開する作戦をとった。一夏VSラウラ、セシリアVS箒の構図となった。



「はあっ!」

ビームライフルでケルディムを撃つ。しかし、シールドビットで防がれる。

「その程度ですか?」

ビットによるオールレンジ攻撃がRアストレイを襲う。

(くそっ、もう斬弾数が…!)

箒はとある作業を行った後にライフルを捨てた。そして、ガーベラストレート「東雲」を構えて迫る。

「私が勝つには、接近戦しか無い!」

「近づけさせませんわ!」

ビットを駆使して距離を開けようとしていた。そう考えていたセシリアとは裏腹に…。

「何故ですか!? 距離が…縮まっている!」

(見える…見える! ビットの動きが、見える!)

東雲でビットを次々とたたき壊していく。いつのまにかビットは全て破壊されていた。

「喰らえ!」

東雲をケルディムに向かって投げる。それはGNスナイパーライフル?に命中し、爆発の衝撃と共に宙に舞う。それをつかみ取るRアストレイ。

「切り捨て、御免!!!!!!」

背後からケルディムを一閃し、シールドエネルギーを0にした。

候補生でない箒が候補生のセシリアを倒した。

「篠ノ之さん、お見事ですわ…」

そう呟いてセシリアは負けを認めた。

一夏&ラウラ side

「はっ、たあっ!」

エクシアとセラヴィーのつばりあいが続けられていた。そこへ…。

「一夏、待たせたな！」

「箒！勝ったのか！？」

一夏は意外だった。箒がセシリアに勝つなんて。

「ごさかしい！」

セラヴィーのGNキャノンからビームが二人を襲う。

「行くぞ！箒！」

「ああ！」

二機は散開、一夏が正面から切り込み、箒が後ろからサポートする形を取った。

「一気に決めるぜ！TRANS - AM！！」

エクシアの機体の色が紅く染まった。GNドライブ搭載型GSの特殊能力「TRANS - AM」の発動を意味する。

「こいつ、速い！」

先程とは比べものにならないスピードでセラヴィーを翻弄する。

「これでどうだあ！！」

GNソードがセラヴィーを斬ろうとしたその時。

「なっ！」

「…！？」

TRANS - AMの時間切れがやって来た。シールドエネルギーを消耗する性質のエクシアのTRANS - AMは、エネルギー残量が残り僅かになると、強制停止する。

「限界までエネルギーを消耗しては、もう戦えまい！」

セラヴィーのGNビームサーベルがエクシアを斬ろうとするが。

「たあっ！」

「ぐっつ…！！」

Rアストレイがタックルを脇からヒットさせて危機を救った。

「この…ッ雑魚があ…！！」

GNキャノンのビームがRアストレイを攻撃するべくチャージ体制に入った。が…。

ドン…！！

「何…!?!」

後ろからのビーム射撃。エクシアの攻撃だ。しかし、エネルギー残量が少ないエクシアにとって、GNソードライフルモードは危険なはず。

その手には、箒が先程捨てたビームライフルが握られていた。捨てる際に箒は万が一の事を考えてエクシアに対してのアンロックを行っていた。ビームの弾を残して。

「この…死に損ないがああ!!」

「よそ見をするな!」

ラウラの眼前に迫る箒。Rアストレイの右手にはビームの玉が形成されていた。その正体は。

「光雷球…!!」

「はあっ!!」

それをセラヴィーの胸部装甲にぶつける。光雷球は一点に攻撃を集中する兵器。シールドエネルギーもそれなりに削れる。

「私たちは、負けない!!」

光雷球の命中地点にバルカン砲「イーゲルシュテルン」をありつたけぶつける。

「ぐああああ…!!」

大きな爆発を起こすセラヴィー。

「箒、凄いな!」

「私が…凄い?」

箒はきよとん、とっていた。

「ああ。お前は凄い」

その言葉に箒の表情が緩む。

「そうか、私はす」

その言葉は途中で遮られた。なぜなら、箒の右肩に。

「うあああああっ!!」

「箒!!」

GNビームサーベルが突き刺さっていたからだ。でも、後ろから

刺さっている。セラヴィーは前にいるのに。

「後ろに何かいる!」

エクシアのセンサーで後ろを調べる。そこには。

「GS...?」

一機のGSが佇んでいた。無人機のようなだ。

「それこそ、私のセラヴィーの最大の特徴、予備GSだ。その名を、セラフィム」

「トライアルリンクシステム、発動!」

セラフィムからレーザーが放たれる。攻撃ではなく、探査の類だろう。それを浴びて機体がおかしくなる。

「ぐっ...エクシアが...動かない!!」

「これが我がドイツで開発された超高性能演算処理機「ヴェーダ」とリンクし、バックアップを得るトライアルリンクシステム!」

エクシアを動かすことが出来ず、ただ立ちつくすばかりの一夏。

「とど...!!?」

ラウラの様子がおかしい。何かあったのだろうか?」

「ハ...カイ...ハカイハカイハカイハカイイイイイ!!」

口調までもが変わってしまった。

「織斑先生!アリーナにLv4警報を!」

『Lv4発令!Lv4警報発令!生徒は教員の指示に従って速やかに避難せよ!繰り返す...』

「まずいな...!篝、お前だけでも逃げろ!」

「馬鹿を言つな!お前を置いて逃げるなど...!」

「お前は怪我をしてるんだ!」

セラヴィーの両手にGNバズーカが展開し、ビームがRアストレイを襲う。

「ちきしょう!...!」

一夏の目がまた変化した。エクシアはそれと同時に動き出し、Rアストレイの盾になった。

「一夏ああああ!!」

Rアストレイの盾になり、展開が解除されてしまった。

「くっ…私は…どうすれば…」

その時、アリーナカタパルトから一機のGSが発進した。

「あれはユニコーン…!?一馬か!」

待機命令を無視してアリーナに飛び出た一馬。

「あとは俺に任せろ!」

「ああ…済まない…」

駆けつけた教員のGN-Xに抱えられて箒は運ばれていった。

「ガンダム、俺に力を貸せ!」

ユニコーンの装甲が割れて赤いフレームが露わになる。デストロイモードの発動だ。しかし、今のままでは一馬は飲み込まれてしま  
う。

「俺の…俺の言うことを聞けええええ!!」

一馬は脳内に侵入してくるNT-Dを押しつけた。

「俺は、ラウラ。君を救う!!」

EPISODE 12 「TRIAL LINK SYSTEM」 (後書き)

次回決着です。

【次回予告】

「ついに制御できるようになった一馬君！」

「はたしてボーデウィツヒさんを救えるのか!？」

「次回もお楽しみに!」

## EPISODE 13 「何かの兆し」 (前書き)

学年別トーナメントの決着です。原作ISの第二巻の終盤あたりです。ちょっと短めです。大晦日で家が忙しいので…。

## EPISODE 13 「何かの兆し」

「俺は、彼女を救いたい！ガンダム、俺に力を！」

ユニコーンの赤く煌めく装甲がよりいっそう輝きを増す。

「一馬、大丈夫なのか!？」

「ああ！彼女は俺に任せてお前達は避難しろ！」

「分かった」

駆けつけた教員らのGN-Xに抱えられて一夏らは避難していった。

「ハカイハカイハカイダァ!!!」

「完全に乗っ取られているな…。解除しか助ける方法はないな…」

ビームマグナムを収納し、両腕のビームトンファアを起動させて接近する。

「ヴェーダだか何だか知らないが、彼女から…彼女から…！」

「出て行けええええええええ!!!!!!」

全力でビームトンファアを用いてセラヴィーを斬る。向こうも負けじとビームを発射する。しかし、それはNT-Dの発動によって発生したエフィールドで防がれる。そうしている間にも次々に斬撃が命中する。シールドエネルギーが0になったのか、展開が解除されて彼女、ラウラ・ボーデウィツヒはその場に倒れる。彼女を抱きかかえる一馬。

「ま、今回は勘弁してやるか」

ラウラは少し目を開けた。そこに写る顔。

(かつこいいい…これが…/ / / ?)

彼女が目を覚ました。医療室のベッドで。

「ラウラ！起きたのか!」



「白枝。五月蠅い。静かにしろ」

「すみません…」

一馬と千冬がベッドの脇に置いてある椅子に座っていた。

「教官…何が、あったのですか…?」

「貴様、トライアルリンクシステムを使っただろ?」

「はい、使いましたが…」

千冬は重要だ。と言わんばかりの口調で続けた。

「ヴェーダに乗っ取られていた。お前は」

「な!?!」

「ドイツ(むこう)に連絡したところ、ヴェーダに何者かがアクセスし、お前がリンクすると暴走するように書き換えられていた。問題はすでに修正済みだ」

ヴェーダにアクセスして書き換えるほどの人物!? 一体誰だ…?

「それと、お前を助けたのはこいつ、白枝一馬だ。礼の一つくらいは言っておけよ」

そう言い残して千冬は部屋を出て行った。

「お前が…私を助けてくれたのか…?」

「ああ」

「すまなかった。私の失態でお前に迷惑を…」

あれ? いつもと口調が…。それに、頬も少し赤い…。何か、可愛い。

「良いつて。んじゃ、ゆつくり休めよ」

そういつて一馬は部屋を出て行った。

EPISODE 13 「何かの兆し」 (後書き)

良いお年を。

【次回予告】

「一馬君凄かったね」

「次回は…織斑君と篠ノ之さんが急接近!？」

「次回もお楽しみに!」

## GS DATE FILE (前書き)

—夏達が装着しているGSの紹介です。

## G S D A T E F I L E

エクシア

装着者 織斑一夏

稼働ユニット GNDライヴ

特殊能力 TRANS-AM

製造元 「ソレスタルビーイング日本支部」

男で唯一GSを装着できる織斑一夏の専用機として開発されたGS。かつて無いほどの高い接近戦能力を持ち、素人である一夏が代表候補生と渡り合えるほど。数少ない純粋なGNDライヴの中でもひとときわ強力な物が稼働ユニットとして使用されている。

ウエポンリスト

GNソード

エクシアの主武装。Eカーボン製の実体刃を装備しており、高い攻撃力を誇る。変形させることで微弱ながら射撃戦にも対応している。

GNビームサーベル

エクシアの両肩の後ろに装備されているビーム兵器。GN粒子で構成される刃は対象の装甲によってはGNソードよりも高い性能を発揮する。しかし、ビーム攪乱幕などで威力が減衰することもある。

GNビームダガー

エクシアの尻付近に装備されている小型ビーム兵器。攪乱幕などによる影響が少ない。やや短めのビーム刃が出現し、目標に向かって投げつけるなどの使用方法がある。二本装備。

GNバルカン

エクシアの両腕に装備されているビーム兵器。威力は低いが連射力に優れ、威嚇や武器破壊に重宝する。

GNシールド

エクシア展開時に装備されているEカーボン製のシールド。直撃

よりもシールドエネルギーの消耗が少なく、避けきれないが防げる攻撃はこちらで防ぐ。

#### TRANS - AM

エクシアのGNドライブの高濃度圧縮粒子を全面開放し機体の能力上昇や特殊能力を付与する。

いままでもTRANS - AMの発動は確認されていたがエクシアのTRANSIAMには今までになく、シールドエネルギーの消耗と引き替えにバリア無効化効果が付与され、攻撃力の強化が見られる。

#### ケルデйм

装着者 セシリア・オルコット

稼働ユニット GNDドライブ

製造元「ソレスタルビーイング」イギリス支部

特殊能力 フレキシブルバースト 偏向射撃 本人未修得

イギリス製のGNドライブ搭載型GS。イギリス製第二世代GS「デュナメス」の後継機。デュナメスからより射撃戦特化の装備になつており、射撃の精度も向上している。装着者がGSとフルシンクロすることでフレキシブルバースト偏向射撃が可能。

#### ウエポンリスト

##### GNスナイパーライフルII

銃身を折りたたむことで、取り回しと連射性能に優れた3連バルカンモードに変形する事が可能なケルデймの主力武器。

##### GNビームピストルII

左右の背部GNバーニアに1挺ずつ懸架された新型ビームピストル。接近戦用に耐ビームコーティングを施した銃剣が設置されてい

る。このコーティングにより敵のビームサーベルを受け止めることができるほか、グリップを垂直に立てて手斧のように使うこともできる。セシリア本人は狙撃戦を好んでおり、この装備はあまり使用していない。

#### GNミサイルポッド

腰部フロントアーマーに内蔵されているミサイルポッド。2連装のポッドを左右各2基ずつの4基、合計8発のミサイルを内蔵している。

#### GNシールドビット

遠隔操作が可能なGNシールド。シールドを自在に分散、密集させることで、多方向からの攻撃に対応できる。左肩に2基、両膝に2基、太陽炉に7基の計11基が装備され、ビットの貯蔵粒子が少なくなつた場合、太陽炉付近のプラットフォームにマウントすることで急速なチャージが行われ、素早い再展開が可能となる。装着者の技量によっては偏向射撃をもなしえる強力な兵器。

フレキシブルバースト

#### 偏向射撃

スナイパーライフル、ビームピストル、シールドビットの発射したビームを自分の意志で弾道を操る能力。ビット系の武装が搭載されているGSに備わっている能力。発動には装着者の多大な努力と訓練が必要不可欠。

#### アルトロン

装着者 鳳鈴音

稼働ユニット ZEROIDRIVE

製造元 中国GS総合研究所

特殊能力 不明

鈴の専用機として開発されたGS。安定した性能と高い格闘戦能

力を持つ。特殊な武器を装備しており、変則的な戦いを得意とする。本人の技量も相まって抜きん出た動きを見せる。

ウエポンリスト

ツインビームトライデント

格闘ビーム兵器。その名のとおりの柄の両端から三又槍状のビーム刃を形成する。アルトロンの主力武器。

2連装ビームキャノン「青龍」シヤオロン

背部に装備された連装ビーム砲。出力・射程ともに優秀な性能を発揮する。また、銃身部は多間接で構成されており、背面等多方向への発砲が可能。

ユニコーン

装着者 白枝一馬

稼働ユニット La+システム

製造元 アナハイム・エレクトロニクス社日本支部

特殊能力 NT-D

第二の男性装着者である一馬の専用機。彼の父である白枝王喜が開発責任者。表向きは別の国へ送る予定であったが、王喜の独断で一馬が運用できるように内密にエクシアのデータを稼働ユニットに組み込んでいる。NT-Dと呼ばれる特殊能力を搭載しているが詳細は王喜しか知らない。

ウエポンリスト

ビームマグナム

ユニコーンの主力射撃武器。通常のビームライフルの数倍ある出力のビームを発射できる。普通のカートリッジを一発撃つだけで空にする為、専用のカートリッジが用意されている。わずかにずれて

命中しなかった場合でも相手のシールドエネルギーを通常のビームライフル並みに削ることが可能。戦闘記録では第二世代量産型GS「GN-X」を一撃で戦闘不能にさせたい。

#### ハイパーバズーカ

ユニコーンの実弾射撃武器。高性能の爆薬を詰めた弾を発射する。途中で炸裂し、広範囲にダメージを与えることが出来る。

#### ビームサーベル

ユニコーンの両腕に装備されているビーム格闘兵器。標準的な威力を発揮し、安定した運用が可能。デストロイモードでは背面に装備される。

#### 頭部バルカン砲

その名の通り頭部に装備されているバルカン砲。けん制やミサイル迎撃に使用される。

#### ビームトンファー

デストロイモード（下記）で使用可能になるビーム兵器。ユニコーンモードでは使用リミッターが発動しており、デストロイモードでのみ運用可能。両腕のビームサーベルユニットを百八十度展開し、装着されたままビームの刃を展開することで古武術の武器「トンファー」となる。

#### NT-D

ユニコーンの特殊能力。発動前はユニコーンモードと呼ばれる。発動するとデストロイモードになる。反射能力、機体速度などが爆発的に上昇する。発動時にはフィールドと呼ばれる特殊バリアが展開し、ビーム射撃を一定の出力まで無効化し、通過した場合でも威力減衰の防御効果がある。NT-Dはきわめて協力だが、装着者



の脳波に干渉し、強い意志を持たなければ暴走する危険性を秘めている。制御可能になれば心強い味方になる。

ヘビーアームズ改

装着者 シヤルル・デユノア

製造元 デユノア社

稼働ユニット 高出力ユニット

特殊能力 無し

フランスの第二世代型改修G.S。開発の遅れているフランスにとって、第二世代型の改修が関の山。しかし、火力は第三世代の銃火力型にも勝るとも劣らない。本人の技量も相まって第三世代とも渡り合える性能を発揮する。

ウエポンリスト

ダブルビームガトリングガン

左腕のシールドと一体化しているビーム兵器。バルカン砲に匹敵する連射力をもつ。この機体唯一のビーム兵器。

ダブルガトリング

両足の膝あたりに装備されている実弾射撃武器。ビームが効きにくい相手にはこちらを使う。

ホーミングミサイル

両肩に装備されているミサイル。高い追尾性能を有している。

アーミーナイフ

射撃戦に特化した本機に装備されている格闘兵器。あくまで緊急用であり、性能は高くない。

シールドピアース

本作品でのみ装備されている格闘兵器。シールドエネルギーを削

る量は第二世代型とは思えないほど多く削る。命中精度は低いが威力だけは第二世代装備最強。接近して使えば心強い。劇中未使用。

ストライク

装着者 更識簪

開発元 モルゲンレーテ社日本支部

稼働ユニット G・U・N・D・A・M

特殊能力 ストライカーパック換装およびPS装甲

モルゲンレーテ社製第三世代型GS。ストライカーパックと呼ばれる戦闘装備を戦闘中に換装することで様々な局面に対応可能な万能GS。簪専用として開発された。

ウエポンリスト

ビームライフル

ストライクの主力射撃武器。どのストライカーパック装備時でも使用可能だがエールストライカー装備時に真価を発揮する。

アーマーシュナイダー

ストライクの両腰にマウントされている小型ナイフ。緊急時に使用される、もしくは目標に投げつけるなどエクシアのGNダガーと同じコンセプト。

イーゲルシュテルン

頭部に装備されているバルカン砲。他社が開発したものとさほど差はない。

ストライカーパック

ストライクに装備される戦闘装備。高速戦や接近戦など様々。

エールストライカー

高速戦闘用のパック。二基の大型バーニアで高い速度を持つ。武

装は標準的な性能のビームサーベル二本。

ソードストライカー

近接格闘戦用のパック。武装は背面パックに備え付けられた大型ビームソード、左肩のビームブーメラン、左腕に装備されたワイヤーアンカー。

ランチャーストライカー

遠距離砲撃戦用のパック。武装は背面パックの高出力ビーム砲、右肩の多目的ランチャー。

フェイスシフト

PS装甲

備え付けられた専用エネルギーを消費し、実体兵器を完全無効化するシステム。GS展開時にすでに発動しており、専用エネルギーがエンプティイになると機能を停止する。未発動時は搭載機共通して灰色の機体カラーになる。

セラヴィー

装着者 ラウラ・ボーデウィツヒ

製造元「ソレスタルビーイング」ドイツ支部

稼働ユニット GNDライヴ

特殊能力 トライアルリンクシステムおよび予備GS「セラフィム」

ドイツ第三世代型GS。ドイツ型第二世代GS「ヴァーチェ」の後継機。ヴァーチェのコンセプトである「圧倒的火力と装甲による高い制圧力」を受け継いでいる。

ウエポンリスト

GNキャノン

両肩、両膝に二門、合計四門装備している。中には隠しマニピレーターとGNビームサーベルが内蔵されている。

GNバズーカEII - ヴァーチェのGNバズーカの発展型。連射性能が向上しており、2基を合体させた「ダブルバズーカ」形態。両肩のGNキャノンと接続した「ツインバスターキャノン」形態など、多様な攻撃法が可能となっている。ダブルバズーカと4門のGNキャノンを連動させることで、セラヴィー最大の攻撃「ハイパーバースト」を使用することができる。

#### GNビームサーベル

両前腕部に装備されたビーム格闘兵器。GNキャノンに装備されているのを合わせて六本装備されている。

#### GNフィールド

機体各部に装備されているGN粒子発生装置からGN粒子を一定量キープさせることで発生するバリア。展開濃度を調節することで部分的に防御力を防ぐことが出来る。武装の粒子圧縮サポートにも使用される。

#### トリアルリンクシステム

ドイツ製超高性能演算処理装置「ヴェーダ」とリンクし、対峙しているGNのユニットを狂わせ、自らはバックアップを得る。

#### 予備GS「セラフィム」

第二代GS「ヴァーチェ」のアーマーパージした状態「ナドレ」の後継機。普段はセラヴィーのバックパックとして装備されている。両肩のGNバズーカはこの機体の腕。武装は判明した物でGNビームサーベル、GNキャノン二門。

#### Rアストレイ

装着者 篠ノ之箒など

製造元 モルゲンレーテ社日本支部

稼働ユニット 高性能ユニット「8」

特殊能力 光雷球

GS学園所有のGS。専用機と量産機の中間的な性能を持つ。学年別トーナメント前に専用機を持っていない成績最優秀一年生に貸し出される。本作品では筭が選ばれた。モルゲンレーテ社製の量産型GS「M1アストレイ」の原型。

ウエポンリスト

ビームライフル

M1アストレイに装備されている物と同等の性能。手のひらからのエネルギー供給により、高い連射製と威力を両立している。

ビームサーベル

こちらもM1アストレイに装備と同等の出力を持つ標準的なビームサーベル。稼働時間が若干向上している

イーゲルシュテルン

頭部に装備されているバルカン砲。

ガーベラストレート「東雲」

Rアストレイのみ装備されている実体格闘兵器。日本刀の形をしており、使用者の技量によってはビームをも切り裂く切れ味を誇る。

光雷球

手のひらのビームライフルエネルギー供給装置付近に一定時間エネルギー球を形成し、敵に向けて投げつける、直接ぶつけるビーム兵器。

フリーダム

装着者 鳳城飛鳥

製造者 篠ノ之束？

稼働ユニット ニートロンジャマーキャンセラー NJC搭載による核エネルギー

特殊能力 PS装甲

飛鳥専用のGS。所属国が韓国ではあるが製造したのは篠ノ之東と思われる。その理由はGSのコアには稼働ユニットに核が使用されないように核分裂を防ぐ「NJ」ニートロンジャマーが装備されている。それを無効化する「NJC」ニートロンジャマーキャンセラーが搭載されていること。各国にはNJとNJCの存在は知れ渡っているが解析技術は持ち合わせておらず、ブラックボックスとなっている。

核が稼働ユニットとなっている事によち、尋常ではない稼働時間を誇り、核分裂で発生する尋常ではないエネルギーで高出力武器を装備している。核分裂がもたらす装着者への影響は0。

ウエポンリスト

ルプスビームライフル

フリーダム主力武器。核エネルギーにより、高い連射性能および長射程を誇る。

ラケルタビームサーベル

両腰に装備されているビーム格闘兵器。核エネルギーにより、長い展開時間と高い出力を誇る。連結させてビームジャベリンとして扱うことも可能。

クスファイアスレール砲

両腰に装備された電磁砲。従来の電磁砲より射程が上昇したこと以外は特に変わりがない。

バラエーナプラスマ収束ビーム砲

背面ウイングに装備されたビーム砲。核エネルギーにより、高い出力を誇る。

PS装甲

基本的にストライクのと同等。核エネルギーで無限展開が可能。

EPISODE 14 「男子達の思惑」 (前書き)

臨海学校に向けての準備！



## EPISODE 14 「男子達の思惑」

「ふう…緑茶は落ち着くな…」

一夏は部屋で緑茶を飲んでいた。心が落ち着くらしい。

「それよりも一夏、箒との約束の時間、あと五分だぞ」

「げー！ありがとう一馬！行ってくる！」

一夏は部屋を飛び出ていった…。

先日、シャルルが女子として再転入し、部屋替えで一馬と一夏が同室になった。その時一夏と箒はとても残念そうな表情だったとか。シャルル…本名シャルロット・デュノアはラウラ・ボーデウィツヒと同じ部屋になったらしい。箒と飛鳥が同じ部屋になり、帳尻が合った。

「遅いぞ一夏」

「ごめん、準備に手間取った。それじゃ、行こうか」

二人はモノレール駅までの直行バスに乗り込んだ。

バスが駅に到着し、二人は市街行きモノレールに乗った。

「……………」

二人は緊張し、言葉が出ない。二人の脳内思考はこうだ。

(…箒と二人きりで外出って、小学校以来だな…。容姿も服装も可愛いし…／／／)

(むう…まさか、一夏の方から誘ってくるとは…私を意識しているのか…？や、やはり一夏は格好いいな…／／／)

二人揃ってにたようなことを考えていた。

二人（よ、よし！）

「箒！」

「一夏！」

「「あ……／／／」」

同時に話しかけたので顔が赤くなる。

ああ、恥ずかしい…／

／／

「レディーファースト。お前から良いぜ」

「う、うむ。何故、私を誘ったのだ？」

箒が一番聞きたかった事だ。一夏は少し赤くなりながら答えた。

「お、お前と一緒に行きたかった。二人きりで…／／／」

ボツ！！箒の顔が発光するくらい赤く染まる。

「わ、わ、わひゃひ…／／」

恥ずかしさから言葉が上手くしゃべれていない。

そんなこんなで駅に到着。市街地へGO！

「どの店にするかな…？」

二人は人混みの中を歩いていた。

「箒、はぐれるといけないから手、つなぐぞ」

「あ、おい！ちよ…！」

箒の言葉を見無視して手を握った。

（もうこれは、デートと称しても良いのではないか…／／／／）

まさしくデートだ。

「ついたぞ」

そこは水着売り場だった。男物から女物まで幅広く取りそろえている。

「結構あるんだな…。んじゃ、お互い選んで決まったらそれを試着」

「了解した。では」

男物売り場と女物売り場は左右に分かれていた。別に異性の売り場にいたら法律違反と言うわけではないが、普通の人は入っていない

い。(入っているのはスタッフとよほどの勇者だが)<sup>カップル</sup>

一夏は黒のスボンタイプを手に取り、最初の場所へ向かった。彼としては派手なのは好みではなく、全面黒、のようなのが気に入っているらしい。

一方箒は…。

「これは…かなり露出するな… / / 一夏が見たら…どうするだろうか…」

箒は絶対に着そうにない水着を手にとって最初の場所へ向かった。一夏はすでにレジで購入しており、箒が来るのを待っていた。すると…？

「あれ、箒？手招きしている…来て欲しいのかな…？」

一夏は箒の下へ歩いていった。

「どうした？」

「あの…だな…。選んでみたんだが…見てもらいたい… / / /」

「それなら、俺のも…」

「お前はどうぞせ全面黒のやつだろう」

ぐあ。思考が読み取られている。

「こつちへ来い」

箒に無理矢理女子試着室前に連れてこられた。

「そこで待っている」

箒は一人試着室へ入り、カーテンを閉めた。

(一夏は…どう見てくれるのだろうか…？)

服を脱ぎながら箒は考えていた。大きな胸が窮屈そうだ。待つこと五分……。

「いいぞ」

箒がカーテンを開いた。

「おお……………」

そこには白のビキニをまとった篠ノ之箒その人がいた。胸の谷間

が眩しい。

「ど、どうだ…?」

「に、似合ってる。最高だあああああ!!」

一夏は自覚なしで絶叫していた。

「ば、馬鹿者!叫ぶな!」

「あ。ごめん…」

箒はカーテンを再び閉め、着替えてレジで購入した。

(箒と色々出歩いて良かったな)

(一夏が、似合っていると…ふふふ!)

二人は終始ご満悦状態で帰って行った。

部屋に一人残った一馬。頭の中に一人の女性が浮かんでくる。

金髪。長い髪型。それは。

「セシリア…」

一馬はその口からイギリス代表候補生、セシリア・オルコットの名前を呟いた。呟くたびに感じる胸の締め付け。

「俺、彼女のこと好きなのかな…?」

一馬本人にとって思い当たる節はいくつかあった。

まず、ユニコーンのN.T.I.Dの発動状況だ。最初は施設での襲撃事件の時。これは関係ない。重要なのは学園に来てからだ。発動時にはその場に必ずセシリアがいた。ラウラと戦った時。そして、対抗戦の時。

「次に発動したときに何か分かるかもな…」

そう言いながら一馬は着替えて部屋を出て行った。

一馬はセシリアの部屋の前に立っていた。ちなみにもう一人のメンバーは鈴だ。

「よし!!」

一馬はインターホンを押した。その少し前…。

セシリア&鈴side

「あんたつてさ、一夏が好きなの？それとも一馬？」

「な、何を急におっしゃいますの!？」

口に含まんでいた紅茶をむせてしまったセシリア。

「いやあだつてさ、最近になって夜中結構な頻度で、一馬さん…一馬さん…つて寝言が聞こえてくるんだもの」

「わ、私がそんな寝言を!？それが原因で鈴さん最近目の下に隈が…」

鈴はセシリアの寝言のせいでここ最近あまり眠れていない。

ピンポン。

「誰か、来られたようです。私が応対しますわ」

「うん、よろしく…お休み…ZZZZ」

鈴はベッドで思い切り寝始めた。

side out

「やあセシリア」

「一馬さん？どうされましたの？」

セシリアは内心動揺していた。しかし、対応にぎこちなさを入れまいと必至だ。

「そろそろ昼時だから食堂に二人で行かないか？そう思っ誘いに来た」

「わ、私でよろしければご一緒させていただきますわ!」

一馬は心の中でガツポーズをとった。

「じゃ、行こうぜ!」

「はい!」

食堂までの道中セシリアは思った。

(私、やはり一馬さんの方が…？瞳も彼の方が…／＼) そう思いつつ食堂へ向かうのであった。

EPISODE 14 「男子達の思惑」 (後書き)

今回は臨海学校！ビーチでの思い出が繰り広げられます。

【次回予告】

「男子二人格好いい〜！」

「篠ノ之さん、どうしてあんなに胸が大きいの…！」

「うさみみは何を語る？」

「次回もお楽しみに！」

**GS DATE FILE NO2 (前書き)**

ここでは敵GSや量産型などの紹介です。

## G S D A T E F I L E N O 2

G N - X ジンクス

稼働ユニット G Nドライブ

製造元「各国ソレスタルビーイング」

各国や組織などで採用されているG Nドライブ搭載量産G S。安定した運動性能に加え多彩な兵器を持ち、G S学園で訓練機として使われるほど。

ウエポンリスト

G Nビームライフル

G N粒子を濃縮し、ビームを発射する。連射性能、弾速に優れる。

G Nロングライフル

G Nビームライフルにロングレンジバレルを装着して狙撃戦に対応可能。

G Nビームサーベル

標準的な威力のビームサーベル。二本装備。

G Nバルカン

頭部に搭載されているビームバルカン。実弾のバルカン砲より威力が高い。

G Nクロー ジンクス系の特徴的な装備。鋭利なマニピュレーターの指先にG Nフィールドを展開し、貫手の要領で敵機を貫く。

G Nシールド 表面にG Nフィールド展開機能を持つG Nディフェンスロッドが設置されている。



ハルファス

操縦者 ハルファス・ニューロ（自動操縦プログラム）

稼働ユニット ジエネレーションシステム

特殊能力 バーニングフレア

クラス代表対抗戦時に乱入した無人GS。背部ウイングに搭載されたファンネル等、特徴手kなぶそつを有する。どのような目的で開発されたかは不明。

ウエポンリスト

クロス・メガビーム・キャノン

背部ウイングの先端から超高出力ビームを発射する。4門搭載。

フェザーファンネル

ウイングに搭載された自立機動兵器。ケルディムのビットより出力は低い但本体の速度が速く設定されている。各ウイングに六機ずつ、合計24門搭載されている。

ビームサーベル

標準威力のビームサーベルより長時間稼働が可能。二本搭載。

バーニングフレア

全身に特殊エネルギーを纏い、相手に向かって突撃する。最大速度はTRANS-AMよりも速い。

オー

操縦者 織斑千冬

稼働ユニット GNDライヴ

特殊能力 無し

製造元 篠ノ之束

一番最初に開発されたG.S。束の研究に協力していた千冬の専用機となる。かつて日本の大型テロ武装組織の戦力をたった一機で壊滅させた。コア及びGNドライブの行方は不明。

ウエポンリスト

GNビームガン

取り回しの良いビーム射撃兵器。連射性に優れる。

GNビームサーベル

高出力のビームサーベル。現在のビームサーベルの祖ともいえる。

ガンダム

操縦者 織斑千冬

稼働ユニット 超高性能反応回路

製造元 篠ノ之束

オーから千冬が乗り換え、現役時代で扱われたG.S。正式名称ガンダムシステムの名前の由来でもある。多彩な武装と操縦者の技量も相まって第01回モンド・クロッソ大会を無傷で優勝している。

ウエポンリスト

ビームライフル

GN粒子ではないビームエネルギーを小型化して携行可能にしたビーム射撃兵器。

ビームサーベル

高出力のビーム刃を形成し、目標を溶断する。背部バックパックに二本装備。

ハイパーバズーカ

高性能爆薬を搭載した炸薬弾を発射する。誘爆性能が非常に高い。

スーパーナパーム

ビームライフルに装着し、焼夷弾を発射する。

バルカン砲

頭部に搭載された兵器。その基本性能の高さから様々な発展武装を産み出している傑作兵器。

**GS DATE FILE No2 (後書き)**

主役キャラ以外のGSはここで紹介していきます。

**EPISODE 15 「海だ！水着だ！」（前書き）**

冬ですが夏まったただ中のお話です。原作キャラの水着はアニメ通りです。

EPISODE 15 「海だ！水着だ！」

アリーナのカタパルトの先端にたっている筈。携帯電話を操作しているようだ。耳元に寄せた。電話をかけるようだ。かけられた相手の方は…。

配線やら何やらが色々あるその場所で異常なスピードでパネルを操作する人物がいた。

くちゃくちゃららららくちゃくちゃくちゃくちゃくちゃくちゃく

暴れん坊將軍のテーマが流れた。

「こっ、この着信音は！！」

音源は携帯電話。瞬間的にそれをとって応じる。

「ひっさしぶり〜！私は寂しかったよ〜 篝ちゃん！！」

相手は篝の姉の束だった。GS開発第一人者の篠ノ之束。篝の姉だ。

「……………！！！！！！！！！！」

篝の携帯からミシミシと音が発される。

「待つて待つて篝ちゃん！」

「姉さん…」

あきれながらも再び会話を始める。

「用件はわかってるよ！用意してありますとも！この天才の直接設計にして規格外！篝ちゃんにぴったしのGS！その名は〜〜〜スサノオ！！」

「スサノオ…」

「……………き！篝！」

「はっ！一夏か…」

箒はバスの中で寝ていた。行き先は海水浴場だ。箒は荷物を旅館の部屋に置いて今のバスの中で寝てしまった。どうやら浮かれているらしい。

「到着したぞ」

完全に目覚めてない体をほおを叩いて起こした。

「うむ、では行こう」

歩いて更衣室へ向かった。

男子更衣室

「しっかし、寂しいな、何かこう…」

「わかる。男だしな」

GS学園の男子は一夏と一馬だけ。

「さつさと着替えて、姫様を待たせないようにしますか」

「おう」

女子更衣室

「すごい…」

「圧倒的…」

「小さい方が良く小さい方が良く小さい方が良く小さい方が良く…」

…

視線を集めていたのは箒だった。その理由は彼女が同年代の女子と比べると遙かに胸が大きいからだ。喋ったのは上から順に飛鳥、シャル、鈴だ。

「一夏を待たせてはいけないな。早く行こう…」

そう小声でつぶやきながら箒は水着に着替えた。

「皆さん！今は十一時です！夕方までには各自旅館へ戻るんですよー！」

「……………は……………い……………!!……………」

女子一同、いざ出陣!!

「一馬、鍛えてんなあ。格好いいやん」

「ははっ、それはどうも」

飛鳥は赤のビキニで出陣した。胸は平均だ。髪型は箒と同じポニーテール。

一馬は白の短パンのような水着だ。専用機のユニコーンと一緒に白だ。

「一夏、結構鍛えてるのね。良いじゃない」

鈴が飛鳥とにたような褒め言葉を言った。

「あれ、箒は？」

一夏は箒がいなかった事に即座に気づいた。少しオロオロしていた。

「そう言えばウチと一緒に来たはずやけど…あ！」

飛鳥は何かを思い出したかのように走っていった。その行方は更衣室だ。

五分後…。

「ほーらそう嫌がることないやろ。おかしくないで！」

「だ、だが……………」

飛鳥が箒を引きずってきた。かなり恥ずかしそうな箒。飛鳥の陰で必死になっている。

「そりゃ！」

飛鳥が箒を前に押し出した。

「おお……………」

一夏は箒の水着姿に見とれていた。きめ細かな肌、潮風に靡く髪の毛のビキニは箒のスタイルの良さと胸の大きさを強調していた。

「……………一夏……………ど、どうだ……………/?」

「お、おう。可愛いぞ……………/ / / / /」



二人とも顔を赤くしていた。それを見た鈴は……。  
（一夏……やつぱり筭の事が好きなのかな……？でも、あたしだって負けないんだから……！）  
一夏奪還を決意した鈴であった。

「ほぐらウラ、見せないともつたいないじゃん。一馬に見せるんですよ？」

「だ、だがな……」

全身タオルに包まれたラウラ？がシャルに説得されていた。

「ん？どうしたんだ？」

「あ、一馬。ラウラがね、水着を見せたがらないんだ」

一馬がやってきた。ラウラはさらにおどおどする。

「じゃあラウラはほっというて二人で遊ぼ？」

「ま、待て！こうなつたら！」

ラウラはその華奢な体を包んでいたタオルを取った。

「おお、可愛いじゃん」

「なぬ！？私が可愛い……私が可愛い……私が……／＼／＼／＼／＼」

ラウラはその言葉でポツ！と赤くなる。

「かゝずゝまゝさゝん！？私をお忘れですわよ……！」

後ろから聞こえたその声。それは……。

「セシリア……」

イギリス代表候補生セシリア・オルコットの声だった。彼女は青のビキニで出陣していた。筭ほどではないが豊満な胸に気を取られる。

「ど、どこを見てらっしやるの／＼／＼／＼！？」

「あ……ごめん……あまりにきれいでさ……」

セシリアはその言葉で赤くなる。

「か、一馬さん……／＼／」

指をつんつんしながらそう呟くセシリア。

「その……オイルを塗って下さいませんか？」

右手に抱えられたビーチパラソル。左手にはサンオイルが。準備万端だ。

「お、OK」

セシリアはせっせと支度を始めた。

「では、よろしくお願いしますわ」

うつぶせなり、水着のブラの紐をほどいた。押しつぶされた胸がエロい。

「お、おう」

手にサンオイルを適量とり、手のひらで暖める。それを彼女の背中にとそつと塗り始めた。

「ふぁ…気持ちいいですわ……」

心地よさに酔いしれるセシリア。

「ありがとございました。とても気持ちよかったですわ……／／」

まだ酔っていた。歩き方もどこか変だ。

「きゃっ！」

足が纏れて転びそうになるセシリア。

「危ない！」

一馬は背中と足にユニコーンを部分展開してセシリアを支えた。支えたは良いが…。

「一馬さん…／／／／」

若干胸を触っていた。後ろからとてつもなく怖いオーラを感じる。

「一馬…何してるのかな？」

左手にガトリングガンのシャル。

「私の嫁なのに何をやっているのだ…!?!」

背後からセラフィムを呼び出したラウラ。

「許さへんでえ…!?!」

両腰のレールガンからビームサーベルを抜きはなつた飛鳥。

「…待ちなさい…!?!?!?!?!」

「うわあああああああああ！！！！！！！」

なんだかんだで楽しい海水浴になった。

翌日。旅館の庭に植えられていたうさみみ。それを見つめる一夏と飛鳥。

「なあ…これって…」

「ウチもわかるで。これ…」

一夏は抜いたらどうなるかを予測した。

「それっ！！」

全力で引っこ抜いた。しかし、うさみみだけだ。

「え？」

二人そろって素つ頓狂な声を出した。そこへ…。

ぐさあああああああああ！

地面ににんじんが突き刺さった。それがまつぶたつに開き…。

「あははははははははは！ひっさしぶり！いっくん！あっちゃん

！」

中から現れたのはかの天才…

篠ノ之東だった。

**EPISODE 15 「海だ！水着だ！」（後書き）**

さて次回はついに筧が専用機を！

**【次回予告】**

「篠ノ之さんに専用機！？」

「黒くて格好いい！！」

「そこへ襲来する無人GS！！」

「次回もお楽しみに！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3435y/>

---

GS～ガンダムシステム

2012年1月8日23時55分発行